

# 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

安 齋 正 人

ラオスの考古学事情は貧困である。ハノイにあったインドシナ地質調査所 (Service Géologique de l'Indochine) 研究員諸氏の業績のいくつか、

Mansuy, H. 1920, Contribution a l'étude de la préhistoire de l'Indochine I ; L'industrie de la pierre et du bronze dans la région de Luang Prabang, Haut-Laos, *Bulletin du Service Géologique de l'Indochine* 7(1).

Colani, M. 1935, Mégalithes du Haut-Laos, *École Française d'Extrême-Orient* 35 et 36.

Fromaget, J. et E. Saurin 1936, Note préliminaire sur les formations cénozoïques et plus récentes de la chaîne annamitique septentrionale et du Haut-Laos (stratigraphie, préhistoire, anthropologie). *BSGI* 22(3).

Fromaget, J. 1940, La stratigraphie des dépôts préhistoriques de Tam Hang (Chine Annamitique septentrionale) et ses difficultés. *Proceedings of the Third Congress of Prehistorians of the Far East, Singapore, 1938.*

Saurin, E. 1966, Le mobilier préhistorique de l'abri-sous-roche de Tam Pong (Haut-Laos). *Bulletin de la Société des Études Indochinoises* 41(2).

同 1968, Station préhistorique à ciel ouvert dans le massif du Pah Xieng Tong (Laos). *Asian and Pacific Archaeology Series* 2.

及び、

安齋正人 1976「ラオス先史洞穴遺跡採集の石器」『考古学雑誌』第61巻3号：43—59頁。を挙げるだけでラオスの考古学関係の主要文献はほぼ尽きてしまう。ここに、私達の先の英文レポートが占める重大な意義があり、更に、調査日誌から書き下した以下の叙述を補遺として載せた筆者の意図もここにあることを理解されたい。

1974年12月7 / 8日

渡辺教授・重松助手・私の3人は日本航空の旅客機に乗って羽田を飛びたち、タイのバンコック経由で翌8日ラオスの首都ビエンチャンに入った。8日13時45分発のタイ航空機は双発のプロペラ機で低空を飛んだので、途中、タイ東北部上空ではコーラト高原の赤茶けた乾季の大地と、森林を

## 安 齋 正 人

蛇行するメコン河の長大な流れを機上から見渡すことができた。ビエンチャンの空港には、この調査の切っ掛けをつくってくれた池田氏と、麗沢大学海外開発協会の現地責任者である淡島氏ら麗沢大学の関係者が出迎えてくれた。

12月9日

午前中、工芸局（織物・陶器・板金工等の小規模な訓練所）で手機織の実習を見学した後、日本大使館に大使を訪ねた。大使の言によれば、この4月に第三次連合政府が成立してこの国にも平和が訪れたかのように巷間で行われているけれど、実状は依然として政府軍とパテト-ラオ（ラオス愛国戦線）軍とは対峙し続けているということであって、両軍の支配地を色分けした壁の地図を見れば、メコン河流域の平野部を除いて全てパテト-ラオ軍の支配地であることが歴然としていた。

その日の午後、池田氏とラオス側から調査に参加するダラ氏を交えて、調査日程・輸送問題・宿泊地選定・調査順序等について討議した結果、最初の調査地として選んだヴァンヴィエン（Vang Vieng）に向けて12日に出発することに決定した。今回の調査に際して危惧された安全性については、ヴァンヴィエンの所在地域は政府軍がなお維持する土地で当局も安全を保証してくれたばかりでなく、午前中会見したパテト-ラオ側の文部副大臣から助言もあって、私達の身に危険はなさそうである。

聞くところでは、この国の下級官僚の給料は月額15,000キップ（2キップ=1円、闇レートは4キップ=1円）程度だということだから、昼食に食べた中華メンが300キップもしたと考えあわせてみると、都市生活者にとって生計は決して楽とは言えないであろう。

12月10日

この日は淡島氏の運転する車でまずダラ氏の事務所に挨拶に行き、次に工芸局と寺院跡を利用した名ばかりの貧弱な博物館を見学し、そして最後に日本大使館に車を回した。これは、今回の調査に必要な五万分の一の地図が市販されていないため、地図の入手をラオス政府に依頼する大使の要請状を貰うためである。

午後は時間に余裕が生じたから、ホテルでたっぷり昼寝を楽しんだ。統治時代にフランス人がこの国に持ち込んだ習慣でもあろうか、勤人や商人ばかりでなく学生などもシエスタを享受しているらしく、昼食に家路を急ぐ自転車の群で正午のヴィエンチャンの大通りははなはだ雑踏してくる。半官半民のランサン（百万頭の家畜）ホテルには北ベトナムからの代表団も同宿中で、そのためか廊下では警護にあたる兵士の姿を見掛ける。4月以来政府側とパテト-ラオ側が連合警察を構成していたから、警護の人数も両陣営から半々ずつ出ているようである。

12月11日

ラオスにはこの当時、考古学関係の部局が個別に2箇所あった。ラオス側から今回の調査に参加するダラ氏の事務所は文部省に属しており、他に宗教省に史跡保存局（Conservation des Monuments historiques）というのがあるが、フランス人顧問の指導下に仏教関係の考古学調査をしていたらしい。フランス統治時代には後者が考古学関係の全権を握っていたのだが、ラオス独立後この

#### 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

機関は何もしてこなかったため、2年前に前者に実権が委譲された、というのがダラ氏の説明である。しかし史跡保存局は現実に存在して機能しているのだし、無断で事を進めてはトラブルの種ともなりかねないという懸念があって、宗教省側の責任者にも事前に会って事情を説明し了解を得ておこうとの心づもりで会見したのだが、埒が明かなかった。

12月12日

連合政府が成立して以来内戦は一応小康状態を保ち、調査地 (Fig. 1) はいずれも政府軍の勢力範囲内にある地域を選んではいしたが、とにかく政府軍・パテト-ラオ軍の両方から安全の保証を確約してもらう必要があったこと、またこの国の現諸官庁にとって今回の私達の考古学調査は外国隊を受け入れる初めての体験であったことなどで、手続きがスムーズに進まず、予定通り本日出発することは出来なかった。しかし数日来関係諸機関を走り廻った甲斐があって、今日になってようやく次のような段取になっていることがわかった。

まず日本大使館を通じてラオスの外務省へ調査の許可を要請する。するとこれに応じてラオス外務省は同国国防省及び内務省へ私達調査団の安全保証を要請してくれる。要請を受けた国防省が安全だと判断してその旨を内務省に通知した段階で自動的に内務省の内諾が得られることになっている。これと同時に国防省からは外務省へも了承の通知が伝達される。ここまできた段階で地理局へも通知が届き、私達外国人にも五万分の一地図の入手が可能となるのである。外務省からは更に文部省と宗教省へこの旨通知が届けられるが、そこでようやく文部省からダラ氏へ同行許可が出されるとともに、宗教省からも私達に調査の許可が下りるといふ次第である。

解ってしまえば手続きは簡単なように思われるのだが、部局間のセクト主義と対抗意識などの官僚的体質や、必要以上にパテト-ラオの危険性を唱えて複雑な保証手続きを求める部局長、そして役所の末端窓口の固陋と責任回避や午後12時から3時まで続く官庁の業務停止、それにラオスの国状に関する私達の無知などが重なって、今日一日ではとうてい手続きを完了することができなかった。

12月13日

望月夫人を初めとする日本大使館の関係者の御助力もあって、この日で事務手続き一切を終えることができた。明日の土曜日と次の日曜日は役所が休みになっているから、当初の予定より2日遅れただけでしかも金曜日中に事を済ませることが出来たのは、幸先良いことに思われ嬉しかった。パテト-ラオの駐在事務所に出かけていた渡辺教授が、先方から協力の約束を取りつけて戻られたことも朗報であった。ごねていた宗教省の方には文部省から話をつけてもらい、調査の許可を与えらるる権限はどちらの機関が有しているのか、という従来あいまいにされてきた問題も無事に解決をみたようであった。

12月14日

いよいよ調査の始まりである。池田氏の運転する氏の自家用車に渡辺教授と重松助手が乗り、レンタルのランドローバーをダラ氏が運転し、それに氏の部下のブンミン氏と麗沢大学が海外援助の一環でヴィエンチャン近郊に拓いた農場で働く今井氏、及び私の三人が同乗して最初の調査地ヴェ

ンヴィエンに向けて早朝ヴィエンチャンを立った。

ヴィエンチャン周辺はサバンナの景観であるが、まもなくして山間に差し掛かると道の両側は竹を主体とした森林に変わってくる。道中立ち寄ったメオ族の村は華いだ正月の雰囲気の中にあって、地酒を振舞われ、若い男女が向い合って鞠を投げ合う遊戯にも呼ばれて加わった。

ヴァンヴィエンは郡下の中心になる大村で国道13号線が村の中央をまっすぐ貫いて北上している。村に入ってすぐ、国道沿いの左手に見えた二階建ての山小屋風のホテルを調査の基地にすることにした。ここの経営者は、東南アジアを旅行中ラオスに魅いられ、ラオスの女性と結婚して住み着いたスイス人で一風変っているが、雇い人の方も外見から判断する限り黒人との混血かと思われる、目の玉がクリクリした大柄の男で、二階の上り口にいつも黙って座っている。一階の一室を渡辺教授に当て、他の一室にダラ氏と部下のブンミン氏が、また蚊帳付きの簡易ベッドを5床もつ二階の一室全部を借り切って、重松助手・今井氏と私が寝起きした。

軍管区の司令官のもとを表敬訪問してから、村の古老たちにも集ってもらって話を聞き、それからここで布教中のフランス人神父を訪れて一日情報収集に努めた。この人達の話をも総合してみると、村の近辺には大小無数の洞穴が点在しているらしく (Fig. 2)、一同明日からの調査の成果を期待し胸をふくらませ浮き浮きしていた。

12月15日

日曜日だが、短い調査日程を有効に消化するためには休んでいられない、調査活動を開始した。ヴァンヴィエンの西隣りを流れるソン川 (Nam Song) 上流の右岸にあるパタン村 (Ban Pha Tang) は、現大谷大学教授の岩田慶治氏が行なった民族学調査で一般に知られているラオ族 (タイ・ヌーア族) の大村である。私達がこの村に立ち寄った時、髪に頭包、耳に銀製の環、頸に項圈という伝統的な服装をしたメオ族の母娘が村の雑貨屋の前にちょうど来合わせていたので、平地のラオ族と垂直的な住み分けをしているこの少数山地民を初めて身近に見ることが出来た。二人は日用品と交換するため3時間の山道を野菜を担いで下ってきたところであった。

パタン村で道案内に雇った老人はなかなかの健脚家であって、村の対岸に流れ込むソン川の支流に沿った細い山道を、途中、丸太を組んで設けられた峠の休息所で一休みしたきりで2時間半歩き詰めてみせた。いい加減私達がくたびれたころ、そそり立つ石灰岩の岩壁が眼前に現われた。近づいてみるとその下に情報通り洞穴は存在していたが、それは川の流れを跨ぐトンネル状のものであって、考古学的遺跡にはまったく無縁のものであった。

12月16日

今日はまず一昨日会って話を聴いたフランス人神父宅を訪ねて行って、彼が所蔵する石器の収集品を見せてもらった。旧石器らしきものは見当たらなかったが、4点の石斧が注意を惹いた。有肩石斧2点と磨製石斧1点とは、ヴァンヴィエンから国道13号線を35kmほどヴィエンチャン寄りに戻ったところにあるソムサク村 (Ban Somsanuk) で、メオ族を定着させるための政策の一環として1970年に村作りが行われた際にブルドーザーが引掛けたもので、他の磨製石斧1点もソムサク

ク村の村人が開墾した近くの焼畑の斜面で採集されたものである。

この話を聞いて早速現地に出向いていったところ、この村も華やいだ正月の気分の中にあった。石器について新しい情報は得られなかったけれども、とある家で軒端下から見つかったという鉄斧や火箸を蔵した壺を出してきて見せてくれたのを、物物交換して手に入れた。村から30分ほど森の中を歩いていくと四方を小高い森に囲まれて焼畑が開けた。畑の底の方に穀物倉庫の役割も兼ねる真新しい出作り小屋が建てられてあって、そのあたりが石斧の出土地点であると説明されたが、稲の切株や下草に覆われていてなにも見つけ出すことが出来なかった。

パタン村の北、ヴァンヴィエンから車で30分ほど行った所にも洞穴があるという情報にもとづき、午後はパタン村のポーチット (Pho Chit) さんを案内にたててそこに向かった。ポーヒエン (Pho Hieng) 村の村長さん所有という田圃を西に横切り、小さな流れ (Nam Pamon) を中洲のところで対岸に徒渉し林間の踏跡を辿れば、岩崖の裾に草藪に蔽われた2つの洞穴を望み見ることが出来る。一つは、川との比高が5～6mの位置にあるニェアン洞穴 (Tham Yeuang) で、奥行が歩幅で約180歩、洞口2.6×1.9mを測る。堆積土が発達した洞穴前のテラスで2個の円礫 (Pl. V-1) を表採した。これらは川原から搬入されたものであろう。他の洞穴は川面からかなり高い地点にあったのだが、堆積土がなく、テラスの発達も見られないので考古学的調査の対象としては論外であろう。

12月17日

この日もポーチット老人を案内に立てて、パタン村の南のナムサン村 (Ban Nam Sang) 付近にあるという洞穴を訪ねた。村外れの脇道を車でソン川まで進む。ここに車を置いて、2本の丸太を並べ長く継ぎ足し、片側に欄として細竹をわたしただけの丸木橋を渡る。左に石灰岩の孤峯を見ながら西に連なる石灰岩の山塊 (Pha Xang) の裾まで続く細い道を辿ると、そのまま大きな洞穴に至る。このホイ洞穴 (Tham Hoi) は遠目には考古学的価値に富んだ遺跡であるかのような相貌をみせていたが、近寄ってみると洞前には鉄柵が設けられてあって、洞内にも大仏が安置されてあった。そればかりか、テラスから仏壇の裏まで床は一面コンクリートで固められ、石窟寺院の体裁にすっかり整備されてしまっていて、発掘の出来るような状態ではなかった。仏壇の裏にも横穴が奥に続いているようなので、30分程辿って歩いてみたが、深い鐘乳洞になっていて窮極を究めることができなかった。

このホイ洞穴が開く岩崖には他にも100mに渡って小洞穴や岩陰が穿たれている。そこで私達はそれらにホイ洞穴から始めて南に順にⅠからⅥまでの番号を付けて呼ぶことにした。そのうちの第Ⅱ小洞では土器片を表採しているが、考古学的には第Ⅳ岩陰の方がおもしろいようである。それというのは、第Ⅳ岩陰南端部の表土を若干剥いだところ、表土直下から人工的に配置された丸石群が現われてきたし、岩陰前には幅3mにもテラスが発達しているからで、将来の調査地候補としてなかなか有望な遺跡であると私達は見做している。

午後からはパタン村のすぐ南に特徴的な姿で聳える石灰岩の孤峯に向った。その麓に開くパタン

安 齋 正 人

小洞穴 (Tham Pha Tang) をはじめとする無名の岩陰群を調査するためであったが、いずれの場所でも考古学的証拠は見い出せなかった。一日の調査を終えて、稲の収穫の終わった田圃の中をパタン村に戻る道、夕日を受けて赫々と輝く石灰岩の山並みが、そして遠く山の辺の道を一列になって、稲束を天秤棒に担いで帰り路を急ぐ女達の菅笠姿が、鮮烈な印象となっていていつまでも心に残った。

12月19日

昨日はラオス入国以来初めての休日であったが、明け方の寒さに鳥肌立ち、風邪をひき、軽い頭痛をおぼえ、一日中ベッドの上で過ごすはめになった。しかしゆっくり休養がとれたから、今朝は気分も体調も良い。

このヴァンヴィエン地域での調査の一日は7時の起床で始まる。7時半に国道を隔てた向い側にある「潮洲飯店」で朝食をとってから、毎朝村の広場で開かれる朝市に出掛けていき、昼食用の蒸しおこわとお惣菜を物色して、8時に出発する。

一昨日廻ったナムサン村よりもヴァンヴィエン寄りにあるポンコク村 (Ban Phon Kok) に立ち寄り、ここで案内人を雇い、村のサオポー (Sao Po) さんの家の脇から稲刈りを終えた田圃を横切って西の石灰岩に向かって進んだ。ヤシの林を抜け、流水を徒渉し、こんもり茂った樹林下をしばらく歩くとほどなくパチャオ洞穴 (Tham Pha Chao) 前が出る。この小洞穴では成果が得られなかった。

またパチャオの西隣にも大きな洞穴と岩陰から成るキトゥート洞穴 (Tham Kithout) がある。洞穴の方は開口部が狭いのだが、洞内はドーム状の大ホールになっていて、さらに奥にトンネル状に続いている。雨季になるとこのトンネルの奥で湧水がおこるらしく、ホールの中央に奥から出口へつづく水流の痕が観察された。そのためここは調査の第一候補地からは除外することにした。岩陰の方でも成果は得られなかった。パチャオ洞穴とキトゥート洞穴の間で見つけた深い岩の裂け目からも考古学的証拠は得られなかった。当日はまったく成果が挙がらず、踏査を早目に切り上げて引き揚げてきた。

ソン川の岸に立って眺めるヴァンヴィエンの夕焼けは殊の外美しい。澄んだ大気の中に石灰岩の山塊を薄墨色に浮かび上がらせ、一刻一刻変っていく空の色を、山の端が昏くなるまで飽かず眺めていた。

12月20日

東南アジアの河川というと、メコン河のように泥に濁った褐色の川を連想するのが一般であるが、ソン川の水は透明に澄みきって碧い。昨日までの陸行と異なり、今日はエンジン付きの小舟2艘に分乗して、このソン川の清流を遡行し、ヴァンヴィエンの上流 5 km の地点にあるパレイ (Pha Lay 斑岩) と呼ばれる大きな岩壁の、その裾に開く目的地レイ岩陰 (Tham Lay) に水上から接近した。柳葉形の乗り舟は吃水が浅いため至極安定が悪く、絶えず左右に揺れるので寸時も立ってられない。途中流れの速い浅瀬にさしかかるや、船頭一人を残して皆中洲に降りて船引して歩かね

ばならない。こんな事態に軽く興奮し、心のときめきをおぼえた舟行である。

このレイ岩陰 (Fig. 3) は一見して有望そうな遺跡だとわかったので、入念に観察し平面図を取った。洞内に入ってみると、土壌が厚く堆積していてその地表一面に獣の足跡が無数に見られ、そしてこれに符合するように中央付近には村の獵人にでもよるのであろうか畏が仕掛けてあった。今日に至るまで、人間の狩猟生活の匂を残している興味深い岩陰である。調査後は対岸で火を起し、船頭が投網で漁した川魚を串焼きにして、この場に相応しい草上の昼食を享受した。

午後からは舟の方向を転じて下流に向った。都合3箇所の洞穴を踏査して回ったが、めぼしい考古学的成果はどこでも得られなかった。しかしそのうちの1つ、ヴァンヴィエンの北西端、ソン川の対岸に望める孤峯の中腹に開いた小洞穴パプアク (Ban Pha Pouak) は、登りが急で接近しづらく先史人であっても常住するには不向で、たとえその痕跡が見つかったとしても、発掘は非常に困難であろうと思われたが、洞口に立ってここから見わたすと、ソン川流域が広く俯瞰でき、調査してきた諸洞穴の複雑な地形も観察できて、見張場所には最適の地であると思った。

12月21日

昨日に引き続きヴァンヴィエンの下流地域を踏査した。カーンマク村 (Ban Khanmak) の対岸にあるパチャオ洞穴は、洞穴前にも洞内にも落石が散乱していて、発掘には困難が伴いそうではあるが、堆積状況から判断する限り、有望そうな遺跡である。

ヴァンヴィエンの南に聳える石灰岩の山 (Pha Lao) 麓に深い鐘乳洞が開き、洞口から豊かに流れ出る澄んだ地下水が、洞穴の前に淵然たる碧水をなし、生い茂る水草の生命の泉となって、付近一帯に閑な憩いの地を形成している。土曜の午後の逢引を楽しむ村の若い恋人達の姿が見られる。

洞穴前の流れを迂回して、踏み痕に導かれるままに斜面を登っていくと、身体を横にすればどうにか擦り抜けられる程度の小さい岩の裂け目に行き当る。一步内に踏み込むとそこはもう闇の世界である。子供の頃の胎内潜りの迷路が思い出されてくる。懐中電灯の頼りない光を頼りに漆黒の奈落の縁を擦り足に縫う。上下左右に忙しく打ち振られるライトに照らし出されてボンヤリ浮かびあがる鐘乳石は、この世に未練を残す死者達の群にも似て気味が悪い。明るい出口にあこがれながら、おぼつかなげにたどっていくと、やがて足元が緩やかな上りとなり、遙か前方に光点が浮かび出た。その光に誘われるように歩を早め狭い羨道を通り抜けると、日の光に満ちた蒼い空間がポツカリ開いて光の世界に帰着した。調査の緊張感から開放されるこうした一時の思い出は今も心に深くしみこんで、時折ラオスへの郷愁を喚起する。

さて、この日でヴァンヴィエン地区での調査は一応終了した。期待にたがわぬ成果が挙げられたことで、次の目的地ルアンプラバン (Luang Prabang) での期待に思を馳せ、皆が鋭気に溢れているなかで、ひとりブンミン氏だけが意気消沈して元気がない。聞けば、今回役所から出張手当がでないどころか、この間の給料まで停止されているので、ヴィエンチャンに残してきた家族のことが心配でたまらない。自分だけが日本人といっしょになってうまいものを食べていていいのだろうか、そんなわけにはいかない。ルアンプラバンへの同行は断り、一刻も早くヴィエンチャンの妻子の元

へ帰りたい、というのが彼の本意であった。就寝まで彼の説得が続けられた。

12月22日

朝8時20分にヴァンヴィエンを出発、渓谷沿いの狭い水田地帯を縫って国道13号線を一路ルアン  
プラバンに向け北上した。パタン村でソン川の流れに別れを告げ、沿道に野生化したバナナの生  
い茂る丘陵地帯を西に越え、リク川 (Nam Lik) に沿って再び北上するとしばらくしてこの流域  
最後の大きな集落ムアンカシィ (Mouang Kassy) に着く。ここまでがおよそ1時間10分の道程で、  
いよいよここからが山岳道路になる。

地図を見ると国道を表わす朱線は蛇行し、曲がり曲がっている。前方には、今井氏が「孫悟空  
の山」と形容した秀麗なパチャオが、山頂を雲のベールに包み隠してひととき高く屹立しているの  
が望める。深い谷を挟んでこの奇峰を右手に見ながら、車は高度を上げる。渓谷沿いの坂道を登り  
詰めて道路が平坦になったところがジャール平原のシェンクアン (Xieng Khouang) への分岐点  
で、ここに政府軍の陣地が構築されていた。11時15分にここを通過、まもなく西方に展望が開けて  
メコンの谷と思われる低地の先に、タイからビルマに至る山波が起伏しながら続いているのが遠く  
望めた。崖の突端に廃虚となったレンガ造りの建物が認められた。以前は観光ホテルとして賑わい  
をみせていたのだが、政府軍が戦時接収して指令部を置いたため、パテト-ラオ軍の攻撃目標にさ  
れ空襲にあって破壊されてしまったのだそうである。このあたりから霧が視界を覆いだした。乳白  
色に包まれた竹山は幻想的で、笹が繁りシャクナゲの混じる霧の樹林帯は、いつしか昔歩いた伊豆  
の猫越峠の光景と重なり合ってきて、時折現われる難民部落やメオ族の集落や政府軍が設けた簡易  
検問所がなければ、ラオスの山中を走行しているとは納得がいかない。ピューカチャム (Phiu Ka  
Cham) 到着は1時半であった。この粗末な雑貨屋の軒を借りて昼飯を食べた。雑貨屋の店先に  
細い鉛管様のものが並べて売られていたが、それは近隣に住む山地民が用いる狩猟用小銃の銃身に  
なる鉄パイプで、彼等はこれを買って帰って、村の鍛冶屋に銃を作ってもらうのだそうである。ピ  
ューカチャムは飛行機の離着陸も可能な滑走路を設けた政府軍の基地であるということだったが、  
すべては霧に没して姿を隠していた。ここからミン川 (Nam Ming) の谷底まで一気に8~900m下  
ってミン川を渡り、再び同じ高さまで高度を稼ぎ、山地を一つ越えると水田地帯が広がってくる。  
もう一度低い丘陵地帯に入って、そこを通過したら王都ルアンプラバンであった。

このルアンプラバンは、最初の統一国家ランサン王国が1353年にこの地に建国されて以来の古都  
で、首都のヴィエンチャンとともに自由都市になっていて、両都市の中立化を保証する合同防衛軍  
・合同警察の発足にともなってパテト-ラオ軍も進駐してきて、この時市の手前に検問所を設けて  
いた。私達の検問にあたった4~5人の警備兵は、黒い人民服と人民帽を着けた、いずれも目付き  
の鋭い精悍な面魂の持ち主ではあるが、どことなく幼さを残した少年兵であった。思うに恐らく、  
ジャール平原で猛爆撃にさらされ、長く激しかった戦闘中に青年・壮年層の多くを失ったのであろ  
う。4時半にブシホテルに到着。

12月23日



#### 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

護衛の警官1人、当地の役人1人を新たにメンバーに加えてメコン河を遡った。ルアンプラバンから航行2時間でパクウ (Rak Ou) に着く。パクウの手前で右岸の崖に洞穴が目撃された。水際から石段が通じ白い石柵で囲まれたこの洞穴の中には仏像が安置されてあって、観光船も立ち寄るそうである。パクウはメコンの支流ウ川 (Nam Ou) との合流点にあって、船着場を見下す高台に展望台が作られていた。双眼鏡で対岸を覗いてみると、林間にパテトーラオの旗が翻っているのが眺められた。そこにパテトーラオ側の監視小屋があって、通行する舟から通行税・物品税を徴集しているということであった。ここはウ川を挟んで両陣営の勢力が直接対峙しているところであるにもかかわらず、いやむしろそのためにベルリンの壁や板門店と同様に、欧米人の観光客がやって来ていた。

ここから河を下りながら兩岸の村々を順次訪れて、情報を収集して歩くのがこの日一日の行動である。主な立ち寄り先を列挙してみると、まずホンキアン村 (Ban Hong Kiane) でティンホーン村 (Ban Thin Hông) から奥に入ったところに洞穴があるという情報を得た。この情報を確認するため後日その村を訪れることになろう。パクスアン村 (Ban Pakxuang) でも2~3の洞穴の所在を知ることができたが、それらは全部パテトーラオの支配地区に属していたから、今回は実地踏査が不可能であろう。またパオー村 (Ban Pha O) では、村の広場から村の背後に望める山の頂上付近に双眼鏡で洞穴が認められたが、若い頃その山に登ったという古老の話では、頂上まで三時間はかかるということなので、これも調査の対象から外すことにした。それでこの日の収穫はティンホーン村の西にあるという洞穴の話だけになった。

夕方ホテルに帰着して初めて、今夜当ホテルにおいて各国大使の集まりが催されることを知らされ、即刻退去するように勧告されて否応なしにプシホテルを追い出されてしまった。代りに紹介されたスポーツセンターの合宿所だという所に着いてみると、そこの鍵の保管者が留守にしている、夜8時過ぎまで戸外で待たされる羽目にあい、災禍は重なるとはよく云ったもので、挙げ句の果てベッドの先約者を名乗る狼藉者に熟睡中をたたき起されたのがすでに丑三つ刻を回る深夜であった。

12月24日

昨日と同じメンバーでルアンプラバンの下流域の村を訪ね、聞き込み作業を行った。往路は右岸の村々に順次船を着けて河を下った。最初に立ち寄ったチャン村 (Ban Chan) は土器作りを生業にしている村で、製品は流域の村に売られるということである。この村ではタッケ洞穴 (Tham Tatke) について、次いでパクルン村 (Ban Pak Lung) でプサン洞穴 (Tham Pou Sang)、サルアン村 (Ban Saluan) でパダオ洞穴 (Tham Pha Dao) の所在を知ることができた。ナムルム村 (Ban Nam Lum) を廻ったところで対岸にあるムアンカイ村 (Ban Muang Khay) に船を着け、河岸の岩に腰をおろして昼食をとった。岸辺で水浴に興じる村の娘達の開放的な嬌声が耳に快い。

食後一旦さらに下流にあるパクシ村 (Ban Pak Si) まで下ってから方向を転じ、左岸のスォム

村 (Ban Xom) を経てシン村 (Ban Sing) に寄ると、この村ではちょうど婚礼が執り行なわれている最中でその興奮の渦中にあった。新郎新婦とその若い友人達を満載した軽トラックを見送った後、閑さを取り戻した村の広場に男衆に集ってもらい、彼等からプモ洞穴 (Tham Pou Mo) とパサヌ洞穴 (Tham Pha Sane) の事を聞き出すことが出来た。この日最後の村チャムングワ (Ban Chamngoua) でも、パタンナイ (Pha Tang Nai) という所に岩陰があるという情報を得たところで、一日の活動を終えた。

その夜、現地で働く海外青年協力隊の5人の青年が私達のことを聞き及んで、ホテルまで訪ねて来てくれた。

12月25日

今日はどうしたのか警官も役人も姿をみせなかった。渡辺教授も体調が思わしくないということなので、重松助手・ダラ氏・ブンミン氏・今井氏・私の五人で出発した。今日の目的地は、一昨日ホンキアヌ村で聞き出したティンホーン村の奥にあるという洞穴である。発動機船に乗り込み、さて出発という段になって船のエンジンが掛らない。弱々しく船体を蠕動させて、渇水期の緩い流れに喘ぎ喘ぎ逆らってようやく遡航し始めたのもつかの間、苛立つ私達を嘲笑うかのように再びエンジンを停止してしまった。渡辺教授と次の行動を相談すべく、一旦陸路をルアンプラバンに引き返す。そこで一時は代休という線も出たのだが、ダラ氏の強い主張もあって再び調査に出掛けることになった。

このダラ氏という人はたいへんな努力家・勤勉家で、常に行動家でもある。この点はこれまで出会ったラオス人の誰とも異なっている。氏にはベトナム人の血が混じっているらしい。奥さんが中国系であり、また以前タイで米軍関係の仕事に就いていたこともあって、ラオス語は言うまでもなく、英語・仏語・中国語・ベトナム語・タイ語も話せると氏自身が言っていた。氏の言動には、今回訪れたこの好機を逸すことは出来ないという気概が感じられるし、必要とあれば日本で考古学を勉強したいとまで考えているようである。フランス統治時代における人材養成の欠落が国内建設のあらゆる面にブレーキをかけているが、そうした国情を憂いる憂国の志士の風貌をそなえた人である。

さて、一昨日河から訪れたパクスアン村までランドローバーを走らせ、そこから小舟でティンホーン村に向けてゆっくりメコンを遡った。目指す洞穴はホアプー (Tham Hoa Phou) と呼ばれていた。村を突き抜け雑木の道を行く。小川を渡り、畑の脇道を川沿いに川上にしばらく歩くと道が分れる。右に道を取り左に水田を見ながら進むと、再び二侯道になる。さらに右に進み、林間の急坂を登り切ると右側に独立丘が見えてくる。三叉路に出たところで右の樹林内に分け入り、溝状の窪地を渡って右に大きく迂回しながら懸崖沿いに登れば、中腹に目標物が見えてくる。

洞穴 (Fig. 4) は南に広くテラスを発達させている。幅2mほどの狭い洞口が南東向きに開いており、洞口とその隣りに丸窓状に開いた壁孔から幽に入る光が、洞内を仄に照らしている (Pl. I-2)。正室は100平方メートル余を測り、床一面に土器片が散らばっていた。中央に人為的な浅い窪

### 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

みが残されていて、そこから歯・骨片・牙製ペンダントなど (Pl. XIV) が集中して見つかった。洞口を狭めるように張り出した岩垂下から見つかった大型の土器片類は、復元すれば完形になりそうだったので、本調査の時一括して掘り出すように元に埋め戻しておいた。洞内をしばらく観察してみると、かなり攪乱を受けていることがわかった。戦時中パテト-ラオ軍が立て籠ったということだから、所々に見られる積石や整地の痕は彼等の活動の痕跡なのであろう。正室の東隅に一人一人が這って通れるほどの穴があり、潜っていくと先に漆黒の小房があった。だが、そこは床一面厚く落石で覆われていて遺物は拾えなかった。正室が括れて細くなった先に奥室もあるのだが、懐中電灯の小さな光では暗過ぎて、その大きさを正確につかめなかった。短時間の調査活動にもかかわらず成果が多く、極めて有望な遺跡であると考えられたので、明日渡辺教授に同行してもらって再度来訪することにして洞穴をあとにした。

夕食後、表採品を水洗し一点一点検討していった。古い形態の拳大のチョッパーがある。ホアビニアンを特徴づける片面加工のスマトラリスもある。それらを整形し刃を作り出す際に生じた石片が混じる。乳棒状の石器もある (Pls. VII-X)。東南アジアに普遍的な縄蓆文土器の破片に混じって、櫛猫きの流水文や幾何形の沈線文を持つ土器片がある (Pls. XI-X III)。調査目的の旧石器時代の確証は得られなかったものの、石器 (Table 1) から判断すると、少なくともこの洞穴の歴史はホアビニアンまで遡るであろう。

1936年の第12回先史学会議、及び1938年にシンガポールで開かれた第3回極東先史学会議の席上、J. フロマジエは北部ラオスのハン洞穴で原人骨と旧石器を、またハン南北両洞穴で中石器時代人骨を発見したと報告している (禰津正志『印度支那の原始文明』) が、その後これを裏付ける調査が行われないうまま時だけが経過してしまっている。この点からもホアプー洞穴の調査の実現を切望してやまない。

12月26日

渡辺教授・重松助手・ダラ氏・ブンミン氏・今井氏・協力隊の青年・県庁の役人・警官・案内人そして私の総勢10人で、再びティンホーンからホアプー洞穴に向った。村は明日からの祭の飾り付けで賑っていた。

洞穴内で簡単に昼食をすませた後、渡辺教授・今井氏・協力隊の青年・警官と私は現場に残り、洞穴の測量を継続する一方、重松助手・ダラ氏・ブンミン氏・県庁の役人は案内人の先導でディン洞穴 (Tham Din) を目指した。この洞穴はホン川 (Houany Hong) の右岸、比高3 m位の高さに北西に面して開口する小洞穴で、床の堆積土は表面が平らであるが各所に段が作ってあって、最近均されたものと判断された。生活の場としてはやや小ぶりだが一時的なキャンプには必ずしも不向きとは言えない。ただし、当面の発掘地として選ぶには不適當であろうというのが重松助手が下した結論である。

夕食時の渡辺教授の口振りから判断すると、ホアプー洞穴が次回の本調査の発掘地に選ばれる可能性が最も高いと推測された。この時点では、その場に居合わせた者の誰一人として、一年後に起

ったラオス人民民主共和国の樹立，そして新政府による私達調査団の入国拒否を予測できたものはいなかった。明日を休日に当てるか，それともパオーの近くにあるという洞穴の調査に出かけるかで渡辺教授とダラ氏との間に意見の齟齬が生じたが，渡辺教授の主張通り休日ということに決った。

12月28日

4日前にルアンプラバン下流の村々で集めた情報に基づく踏査のため，もう一度サルアン村にまぎ向かった。村を通り抜けて村の裏手に立つと，地味な色合いの腰巻がのんびりと物干しに揺れているのが柵越しに見え，刈り入れの終わった稲田も柔かな日を受けて和やかに展び，田圃の尽きたその先に低い岩山が望めた (Pl. II-1)。その岩山の中腹にパダオ洞穴はある。陽光の下，遠目には手頃な大きさで格好の住居と映ったが，行き着いてみるとテラスも洞内もコンクリートで塗り固められていて，洞内に設けられた壇上に小仏像がピッシリ並んでいた (Pl. II-2)。村人の話では，対岸にもプーモと呼ぶ洞穴 (Tham Phou Mo) があるそうだが，場所が高いところにあって近づき難いうえ，入口は狭く，床も岩が露出しているということなので，現地を踏むまでもないと判断して行かずに放棄することにした。

パクルン村の人達も裏山にあるプサン洞穴を寺院代わりに利用していた。この洞穴は2 m四方の岩のテラスを持つ奥行2 mの小さいもので，中に仏像が安置してあった。

パタンナイの小岩陰はメコン河に臨んだ急峻な崖の中程にあって，ここでも考古学的証拠は得ることができなかった。メコンを見下す岩陰前の狭い岩場に銘々腰を下ろして昼食にした。河の中ほどに浮かべた小舟から水に飛び込んで遊ぶ子供達の歓声・哄笑が岩に飴し響きわたって，和やかな雰囲気包まれてくる。

食後に対岸に船を回し，岩に横付けした船から崖をはい登って近づいたタッケ洞穴でも，考古学的証拠は見い出せなかった。

12月29日

この調査には日常的な一週間のサイクルはない。年も押し迫った29日の日曜日でも，ルアンプラバン地区で唯一残っていたパオー村周辺の踏査に出かけて行った。渡辺教授の体調が相変わらず思わしくなく，この日も先生にはホテルで休養をとっていただいた。6日前最初にこの村に来た時点では，村から遠すぎるという理由で一旦放棄した山奥のコクンギョ洞穴 (Tham Kok Ngiou) が目標で，そこまでの道案内役として，パオー村の2人の若い猟師を雇った。

里巷を外れて山道に差し掛かるや，ただちに傾斜30度を越すであろう急な直登になった。ゴム草履を突っ掛けた村の猟師の並足も，私達にとっては速歩に等しく，ここで一同すでにバテ気味である。前を行く猟師が背負う鉄砲の筒先がちょうど目の前に躍り，気が気でない。額に背筋に汗が伝わる。山道が尽きるところから竹林が始まる。依然として道なき道の急登は続く。笹を払い，茨や小枝に悩まされつつ高度を上げ，大きく迂回して岩場の下にたどり着く。そそり立つ石灰岩の裾に小岩陰が点在しているのが認められた。これらは問題にならない。この地点で海拔およそ600mである。さらに岩壁に沿って高度を上げていくと鞍部に出るから，この鞍部を越えて反対側の斜面に

### 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

回り込む。ここでも岩陰にでくわしたが、これも問題外である。蔓や木の根を頼りにごつごつした石灰岩の岩肌を更によじ登ってようやくコクンギェ洞穴の前に至る。幅わずか1.5m、長さ4mほどの狭いテラスの先は深い谷となって垂直に落ち込んでいるが、北部ラオスの鬱蒼とした樹林の山々に遮ぎられて視界がきかない。狭い洞内の床面はすでに平らに均されていて、最近も人が使っていたような痕跡が認められた。

将来の発掘調査の候補地選びという本来の目的では徒労に終わった今日の踏査行であったけれども、個人的体験としては愉快的な一日であった。

12月30日

翌日飛行機で帰る渡辺教授をルアンプラバンに残して、5人の隊員を載せたランドローバーはヴィエンチャンに戻るため7時半に出発、往路を逆に辿った。山中はまた霧であった。有名な黄金の三角地帯に近いこの山間部でも、メオ族の集落付近の急斜面には、遠目にチューリップ畑かと見紛う赤白のケシの花が栽培されている。圧巻はシェンクアンへの分岐点からムアンカシに至る道中の景観で、パチャオ(Pha Tiao)の奇怪な山容を中心とした山波が重畳し一大パノラマを展開している。ダラ氏のタフさには改めて驚かされる。途中で昼食のためヴァンヴィエンで一時休息しただけで、危険の多い山路を10時間余りも運転し続けながら、なお私達よりも元気旺盛であった。夕方6時を過ぎてヴィエンチャンに到着した。

12月31日

大晦日、1974年最後の日である。簡単に残務を済ませ、午前中は池田氏の案内で、氏が技術指導をしている農場やその農場近くの寺院と古いストゥーパ跡などを見物して廻った。タイへの公式な窓口でメコンの渡し場のあるタドゥア(Tah Deua)に行き、対岸のノンカイ(Nong Khay)の町並を眺め遣りながらここで昼食を摂った。

食後、渡辺教授を出迎えるため空港に車を廻した。飛行機は1時間15分遅れて到着したが、これは上出来の部類であるようだ。ホテルランサンに戻ると、折から滞在中の中国経済使節団の黒い人民服姿がロビーに溢れていた。物珍しそうに眺めてでもいたのであろう。その中の一人が近づいてきて日本語で話しかけてきた。ロビーのソファに掛けて小一時間ほど話したであろうか、何を話したか忘れてしまったが、これが中華人民共和国の人と言葉を交わした最初の体験となった。

夕食は関係者一同ヴィエンチャンで唯一軒の日本料理店「大和」に繰り出し、ここは韓国人経営の店で純日本料理とはいかなかったが、馴染みの肴物を添えた日本酒で大晦日の晩餐を心行くまで愉しんだ。

1975年1月1日

年明けて正月元旦、異国で迎えた初めての正月であるが、いっこう元日らしいところがない。今、当時の写真を取り出してみると、腕捲りした白いワイシャツ姿で写っていて、特別暑い日であったと記憶している。朝は池田氏の御宅でおせち料理を御馳走になって、正午から日本大使公邸の中庭で催される恒例の元旦の集いに参加し、その後渡辺教授と重松助手と私の3人は街のレストランに

安 齋 正 人

出掛けて行って内輪で新年を祝った。一日食べ続けて張った腹は、夜、腹ごなしに麗沢大学の人達とボーリングを楽しんで癒した。

1月2日

私達の一年の仕事始めの日となった。午前中、レポート用に表採遺物のモノクロ写真を撮り、午後にスライド用のカラー写真を撮った。

1月3日

ダラ氏の事務所で重松助手といっしょに遺物台帳の作製にあたった。夕方4時過ぎ、事務所で仕事をしていたラオス人が皆庭に出て、即席のテーブルを囲みだした。何事が始まるのだろうか。私達も輪の中に加わる。ラオスの焼酎ラオ-ラオを飲みながら軽食をとるラオス式仕事納めであった。いつから慣例になっているのか訊き漏らしたが、毎週金曜日に繰り返されているそうである。

麗沢大学の井田先生が明日帰国されるということで、今晚も池田氏宅に招待を受けた。ヴィエンチャンに戻って以来、連日、夜の外出が続いたので、心身共に多少疲れ気味で、新たな調査地に向け出発する明日が千秋の思いで待たれる。

1月4日

朝8時30分発の小型双発機で最後の調査地であるタケックに飛んだ。今回は今井氏に代って氏の同僚の青木氏が、ブンミン氏に代ってウゴン氏が同行することになった。顔の広いダラ氏はフランス人の機長とも顔馴染みらしく、操縦室に自由に出入りし、帰りしな機長の飲んでいたワインを掠めてきたと耳打ちして、飲むかいというようにグラスを差し出したりもした。窓がバタバタ風に旗めくこのボロ飛行機には、酔っ払いの操縦士と酒に目のない乗客は似合いであろう。

タケックはラオスの南部のメコン河に臨む小さな町であるが、対岸のタイの影響を強く蒙っていて、街の商店の陳列棚にはテレビ・トランジスタラジオなど現代的電化製品が飾られていたり、赤いスーツに白のパンタロン姿の娘も見かけたりする。メコンの両岸20kmの範囲内はラオス人もタイ人も自由に往来できるということであった。

当地では山根氏に何かとお世話になった。氏は敗戦後、日本軍から脱走してそのままラオスに留まり、ラオスの独立のため身を呈して働いてきた。現在は大佐の肩書きを持つ著名の士である。またここはダラ氏の父君が警察官として勤務された土地でもあって、顔の広い氏のことではあるが、一層知人が多いようで、タケックでの便宜もすべて氏に頼りきっている。

1月5日

タケックの朝市にも珍しいものがない。コウモリ・ネズミ・ヤゴ・カエルなどが東になっているのは普通に見かける。豚の頭、毛が付いたままの水牛の肉、ネズミジカ・ムササビ・サル・ヘビ・オタマジャクシ・ゲンゴロー・タガメなどもある。

調査の第一日目は例によって洞穴の存否に関する情報収集である。始めにタケックの北東にあるタム村(Ban Tham)に寄り、付近に多数の洞穴・岩陰があるという情報を得た。この村の後背をなす石灰岩の山塊を迂回して12号道路をさらに北東に進むと、山塊の両側が道路に迫り、狭い地峡

#### 補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

をなす地点に至る。点々と洞穴が目撃されるが、これらはいずれもこの地の守りに就いている政府軍が占拠して、兵隊の生活の場となってしまっている (Pl. IV-1)。昨日の山根氏の話では、一応ここまでが安全地帯ということであったが、守備隊長はなおしばらく先に行けると保証するので、数キロ東にあるクアンファヴァン村 (Ban Kuanphavang) まで足をのびした。M. コラニがここより更に東方ベトナム寄りのマハシャイ町 (Muong Mahaxay) 周辺の石灰岩の山塊にも多くの洞穴遺跡があることを報告している (1932年にハノイで開かれた第1回極東先史学会議事録, *Praehistorica Asiae Orientalis I*, Hanoi, 1932)。

午後は地峡の北に位置するトーク村 (Ban Thok) とナグノ村 (Ban Nagno) を回り、その後西に方向を転じ、タケックから13号線沿いに北西に向かった。ドーン川 (Nam Dôn) を渡り、ナタット村 (Ban Natat) に入った。山根氏の保証する西の安全地帯はここまでであったが、私達は更に東に小道を選んでサンゴム村 (Ban Sangom) にも行ってみた。

夜山根氏から、明日はデモが予定されているので巻き込まれないように注意してほしい、との伝言を受け取った。当地も二日続いて曇り日の肌寒い天候である。

1月6日

朝調査に出掛ける前に、地区の行政長官のもとに挨拶に出向くと、情勢が不安定だから出発を見合わせるよという勧告を受けた。対応策もないので宿舎で待機していると、ホテルの前を十数人の若者を乗せたトラックが賑やかに楽器を奏でながら通り過ぎていった。どうもこれが本日のデモ隊らしく、拍子抜けしてしまった。9時頃になって、ホテルの近くの広場で集会が開かれたので行ってみると、リーダー格の青年がアジ演説を始め出した。彼の言うところは、パテト-ラオとの協約をすみやかに守れという要求らしい。十数人の若者が周囲を取り巻いているばかりで、町の住民は遠くから見守るだけである。それでも商店は早々と扉を降ろしたところが多い。時々兵士が見回りにやって来る。手渡されたアジビラを読んでもらったところ、軍隊・警察が工場のストライキに介入すれば、パテト-ラオ側も介入するであろうという意味のことが書かれてあるらしい。しかし、集会は何事もなく昼頃自然解散になった。なおしばらく待機して様子を見ていたら、その後街には、南のサバナケットからヘリコプターで新たに兵隊が送り込まれたという噂が流れてきた。

午後から夜にかけて、雨らしい雨が降った。この時期の降雨はたいへん珍しいことである。

1月7日

今朝の市は買い出しの兵士でごった返していた。通りにも兵隊姿がやたらと目につく。いずれも完全装備である。彼等は昨日噂に聞いた、来援した精鋭300人のパラシュート部隊であろう。

私達も定刻より遅れて10時20分に活動を開始した。12号道路と13号道路との分岐点に装甲車が配備されていて、私達はそこで検問を受けた。道を12号にとって、今回の調査の主目標に選んだタム村に向う。タム村の前面に広がる水田地帯は1962年の激戦地であった所だけに、踏査中、岩陰で白骨や遺品が風雨に曝されているのを何度となく目撃した。

村の背後は切り立つ石灰岩の壁で、村の名前の所似となった洞穴・岩陰が多数見られる (Fig. 5)。

接近順に記すと、パダン洞穴 (Tham Pha Dang) ・岩陰Ⅱ～Ⅷ・コクキアン洞穴 (Tham Kok Kiang) ・クアンヴェン洞穴 (Tham Kouang Veng) ・カオ洞穴 (Tham Kao) ・スアン洞穴 (Tham Seuang) の諸洞穴が確認出来た。第Ⅲ岩陰はたいへん大きな規模のもので、床面から土器片を多数採集することができた。だが、この岩陰の床面は外の平地面と同じレベルかそれより低い所もあって、雨季には流水が表土を洗い流している模様であった。

カオ洞穴 (Pl. Ⅲ-1) は平地からの比高が20～30m はあり、洞内が洞口部よりも5～6m低くなっているため、底は真暗である。降りていくと、暗闇の中で人の動く気配がし、奥で仄に灯が揺れている。村の女達が、畑の地味をよくするために畑に撒く、コーモリの糞の混じる肥沃な堆積土を掘り出しているところであった。光に照し出された床は凸凹になっていて、場所によっては数メートルも掘り込まれてしまっている。すっかり攪乱されてしまっている洞内を落胆しながら先に進んでいくと、光の輪の中に絵らしきものが浮かび上った。驚き慌てて右に左に振り回した懐中電灯に壁面のいたるところに描かれている線画が照らし出された時、思わず大声で叫んでしまった。「先生、絵が、絵があります。」

1月8日

夜中の午前1時45分、突然轟きわたった大音響に睡眠を破られた。朝になってわかったのだが、これは携帯用のM27という発射砲から射たれた2発の手榴弾の炸裂音であった。間断を置かず続いて比較的近距离からM16ライフル銃の射撃音がいつとき連続的に響いて止んだ。跳び起きてベランダから身を乗り出していたのは私達4人の日本人だけで、町は何事もなかったかのように夜の闇の底で寝静まっていた。

夜が明けてから役所に出向いていったが、通行許可が下りないため町から出ることができない。情報から隔離されたまま、自分達の置かれている状況も把握できない。ただ街だけは平常通りの静かな佇まいをみせていたから、不安に捉われることはなかった。午後になってようやく軍と警察の両治安局から通行許可証を得ることができた。12号線と13号線との分岐点に昨日設けられていた検問所には2人の歩哨姿が認められるだけで、咎められることなくここも通過することができた。

カオ洞穴内の壁画の写真撮りと模写をする作業を急いでいたので、好奇心に駆られて集まってきたタム村の男衆と娘や子供の手を借りることにした。太い竹を切り出して村人が作ってくれた梯子を利用し、岩にへばりついでる作業であった (Pl. Ⅲ-2)。

絵は低い所で床面から1m、高いものは7～8mの位置に描かれていて (Fig. 6)、二段継ぎの竹梯子に登らなければ届かない。顔料は黒・茶・白の3色が用いられ、線描画が普通だが、シルエット状に塗り込めてあるものも見られる。大雑把に分けて3つのグループに識別できる。洞口近く、奥に向かって右手の高い位置に象の一群が描かれている (Pl. XV-1, Fig. 12)。この一群は写実的で的確な描写である。象狩りと思われるシーンも描かれている (Pl. XV-2)。得物を振り上げ鬨の声をあげる勢子。象に跨がる象使い。今もラオスの南部で行なわれている象狩りの方法である。動物 (Fig. 13) は、人物像がすべて正面向きに描かれているのとは対照的に、左右どちらか



の側面向きに描かれている。この動物の方向性、すなわち洞口を向いているのか洞奥を向いているのかという点にも、絵の配置や画法とからんで編年や解釈の手掛かりが隠されているかもしれない。第2のグループは槍を持つ戦士の一団である (Pls. X VI-2, X VII-2, Figs. 8, 9)。馬に跨がる者もいる (Fig. 14)。騎馬戦のシーンも描かれている (Pl. X VII-1, Fig. 15)。ここにはルアンブ  
ラバン王国・ヴィエンチャン王国・チャンパサック王国の三王国鼎立時代の抗争、あるいはビルマ  
・シャム・ヴェトナム・ホー族など隣国異部族の侵攻などいまだに解き明かされない歴史時代の一  
齣が描かれているのかもしれない。最後の第3のグループは歌舞音曲の図である (Pls. X VIII-2,  
X IX, Fig. 11)。基壇に座る楽団は拙ない描写ながら中国雲南省石寨山出土の青銅製の「八人舞曲  
銅釦飾」(カタログ『雲南博物館青銅器展』1984)を連想させる。甕にチューブを差し込んで酒を  
飲んでいる男が描かれている。後日、カー族の村 (Ban Sa Ngom) で、集会中の男達が中央に置  
いた甕から竹筒を使って酒を飲んでいるのを実際に目撃したが、これはまさに民族考古学の実例と  
なろう。洞穴の壁に描かれた人物達は戦士も舞人も皆髻のようなものが描かれており、特徴のある  
画風である。以上の他に寺院のような構築物 (Figs. 7, 10) や描法の異なる人物像 (Fig. 7) があ  
る。これらは、白墨よりの白線で飛行機やフランス人らしい西洋人を描いた新しいものも混じるが、  
先史時代まで遡らないまでも全体に時代は古いと考えてよさそうである。

カオ洞穴の壁画には、信仰・崇拜・呪術に関することや象徴的記号といったものよりも、日常生  
活や世俗的出来事の記録といった性格が強く反映されていて、ヨーロッパの先史洞穴絵画で指摘さ  
れている (Sieveking, A., 1979. *The Cave Artists*. Thames and Hudson) pictographic な解釈  
も mythographic な解釈も借用する必要はないだろう。現在のところ近隣にこれらの絵と比較で  
きる岩壁画はみつかっていない。タケックに近い東北タイのウドンタニ (Udon Thani) 県でみつ  
かっている岩壁画 (Muang Boran Journal, vol. 4, no. 4, 1978, Bangkok) も、その南の同じく  
ナコンラチャシマ (Nakon Rachasima) 県でみつかったもの (同, vol. 9, no. 1, 1983) もカオ洞  
穴のものとは異なっている (文献は新田栄治氏の御教示による)。また中国雲南省滄源で近年みつ  
かった岩壁画 (『文物』1966年第2期と1983年第2期) は画風がやはり異なる。時空間を超えて見  
回せば、画風も題材も似たものがインドにみられる (Brooks and Wakankar, 1976, *Stone Age  
Painting in India*. Yale Univ. Press) が、これは恐らく原始絵画の一般的類似の範疇内に収まる  
現象であろう。

夜8時以降の外出禁止令が出された。更に飛行機2機分の降下部隊が来援したとも知らされた。  
昨夜の事件はデモ隊を支援するためパテト-ラオの小隊が町に侵入したために起こった、というの  
がダラ氏の説明であったが、真相はストで閉鎖された工場に軍が実力行使をしたというところらし  
い。

1月9日

本日の午前中で壁画の模写をほぼ終わることが出来た。カオ洞穴内での作業を終えて村の娘達が  
作ってくれた湯麺の昼食を摂り、午後から別の洞穴を2~3箇所見て回ったが、カオ洞穴の絵と異

安 齋 正 人

なる幼稚な人物画を若干見つけたほかはめぼしい成果が得られなかった。一日の作業が終わったところで、私達との別れを惜しんでくれた村人が三々五々広場に集って来た。そして自然に人の輪がつくられていった。年頃の娘2人を相手に、ダラ氏・ウゴン氏・青木氏・私と見様見真似の踊りを踊った。それは伝統の求愛の踊りだという。そして別れの合掌をして、この村を去った。

1月10日

タム村の調査が終り、別の村を調査するため新しい通行許可証を得てから出発した。昨夜、南のサバナケットに通じる道路上で衝突があり、デモ隊側に死者1、負傷者11の被害がでたと聞いた。その余波で今朝は途中3箇所検問を受けた。

今日の目的の村サンゴームは少数民族カー族の村で、ダラ氏もここの村人の言葉は通訳を介さなければ解らないと言う。サンゴーム村に入ると、村の男衆が広場で円陣にしゃがみこんで集会中であつた。その輪の中央には酒を満した甕が置かれているのが目撃された(Pl. V-2)。中央に進み出て甕の中を覗いてみると、粃殻の浮いた酒は白濁して醗酵中らしく、プクプク泡が湧いている。水を加えながら細い竹筒を使って回し飲みするそうである。早速試飲させてもらう。竹筒から酒を吸い込みながら傍らの防水加工した編み籠に目をやると、酒の目減り分を補って加えている水は粘土で灰色に濁っているではないか。筒を底に押しつけてそれ以上飲まないようにと、気配をさしたダラ氏が耳打ちしてくれた。

どうも私達は歓迎されざる余所者であるらしい。同行を渋っている村人をようよう説き伏せて、ともかく4人の男が案内してくれることになった。乾季に火入れして焼かれるため村の周辺はサバナ状を呈している。疎林の間に孤立した石灰岩の山が点在していて仲々の奇観である。そうした石灰岩の山腹に生じた細い亀裂状のトンネル道を通して山の反対側に出なければ、ドンク洞穴(Tham Donk)へは行かれない。ドンク洞穴に着いてみると、洞内にはかつて大きな仏像が安置されていたということであるが、今はすっかり取り払われてしまって跡形もなく、台座の位置に巨大な窪みが見られるにすぎなかった。掘り返された台座跡の窪みの周縁を丹念に観察して回ったが、考古学的徴候が見つからない上、4人の村人はいわくありげに全く口をきかないから気味が悪く、早々退散してきた。

1月11日

タケック地区における一週間の調査はまたたく間に終り、帰りも双発機でヴィエンチャンに戻った。

1月12日

今日から遺物の整理に取り掛るつもりでいたのだが、日曜日のため事務所に所員がおらず、鍵の所在もわからなかったので、一日延ばすことにした。ヴィエンチャンは雨模様で肌寒い。一週間以上も天気が悪く、近来にない天候不順だそうである。

1月15日

12日の午後いっぱい、13、14、15の3日間で遺物や図面の整理、会計事務を完了させた。

補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書

1月16日

重松助手がインドネシアに向け飛び立っていった。午後2時半発のところ、12時に空港に来てしまったから、大いに時間を持て余していたところに、ルアンプラバンから来る飛行機の到着が大幅に遅れたため、結局4時間も空港に居ることになった。渡辺教授は軽い気管支炎を患って、当日の出発をみあわされた。

1月20日

渡辺教授が帰国の途につかれた。まったく珍しいことに飛行機が定刻に離陸したので、出発時間に合わせて空港に見送りに来たダラ氏夫妻とウゴン氏は先生の出発を見送ることができなかった。



1. Tham Pha Chao. Looking down at the banana plantation from the interior.

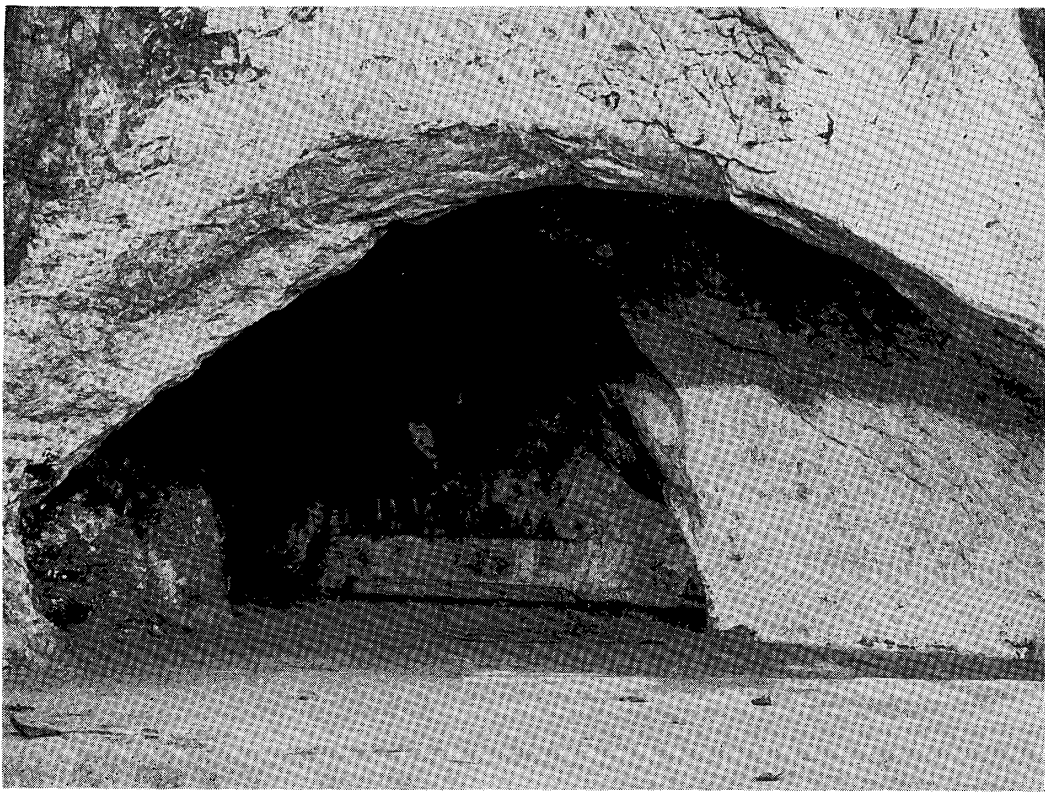


2. Tham Hoa Pou. Interior view of the entrance.

Pl. II

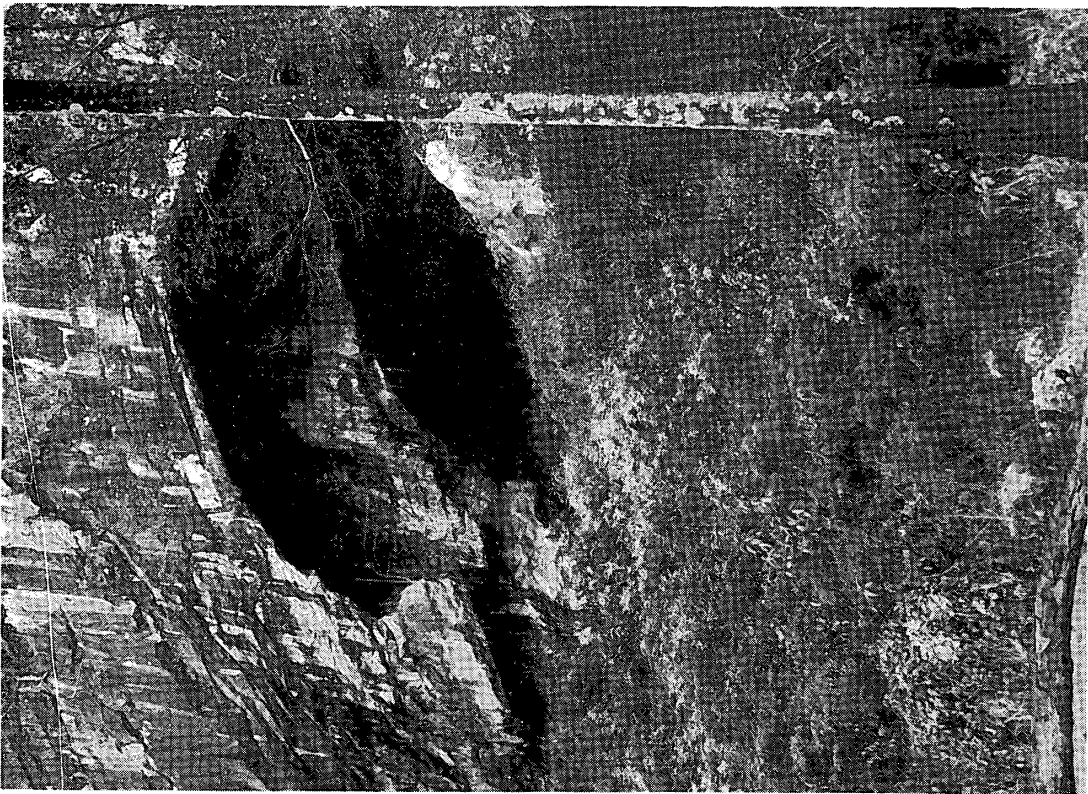


1. Distant view of Tham Pha Dao from Ban Saluan.

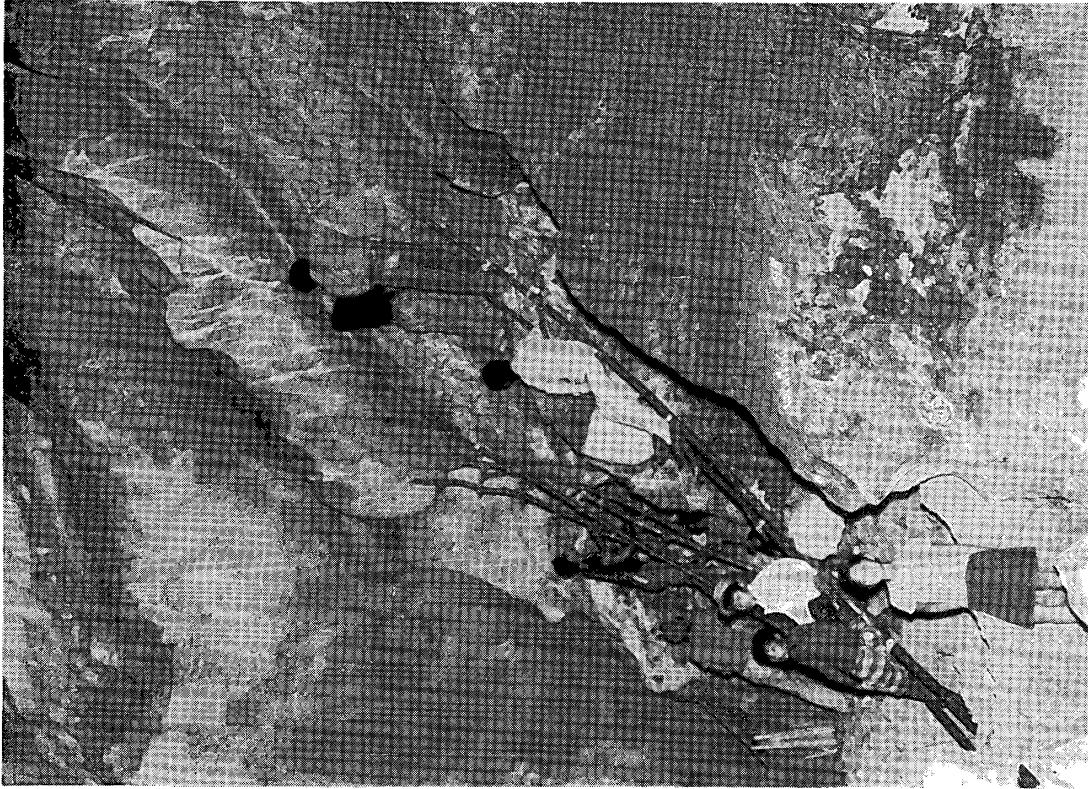


2. Tham Pha Dao. Outside view of the entrance. An altar with Buddha statuettes is seen inside.

Pl. III



1. Outside view of Tham Kao, Thakhek area. Many drawings of men, animals, and men riding on animals were found on the cave walls.



2. A team of investigators tracing the wall drawings found inside the cave of Tham Kao. The tracing was made with semi-transparent paper and soft pencils.

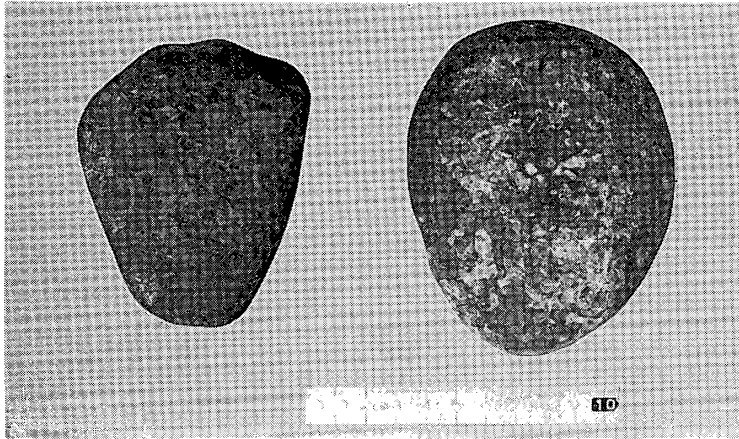


1. Some of many caves at a limestone cliff between Ban Tham and Kouanphavang. Most of them including those in the photograph were occupied by soldiers.

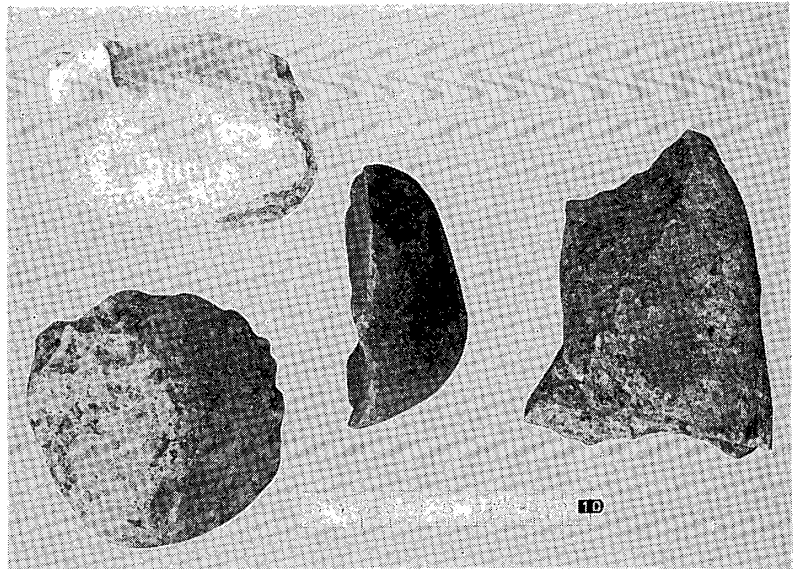


2. The inhabitants of Ban Sangom at an open air meeting drinking rice wine with tubes from a big jar. The traditional custom may enable interpretation of a picture on the cave walls of Tham Kao.

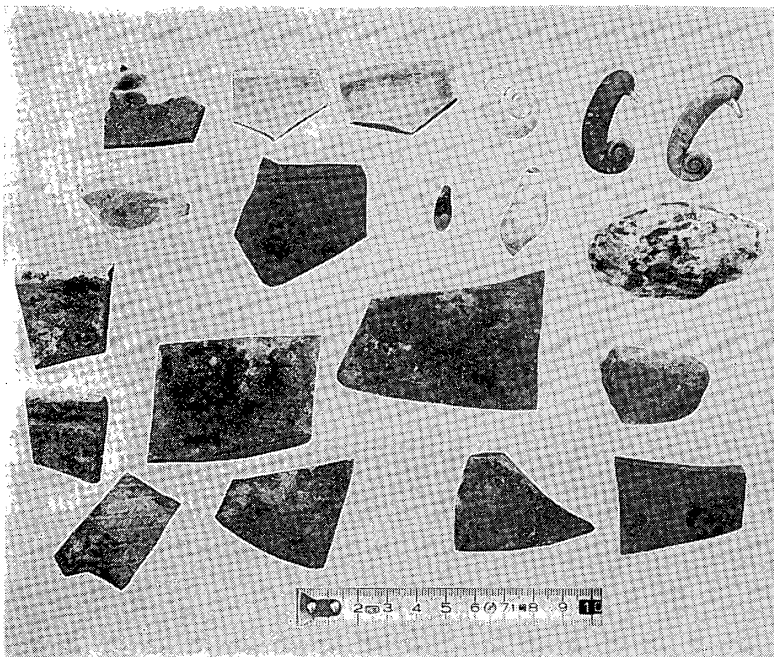
Pl. V



1. 2 round pebbles from the terrace of Tham Yeuang.



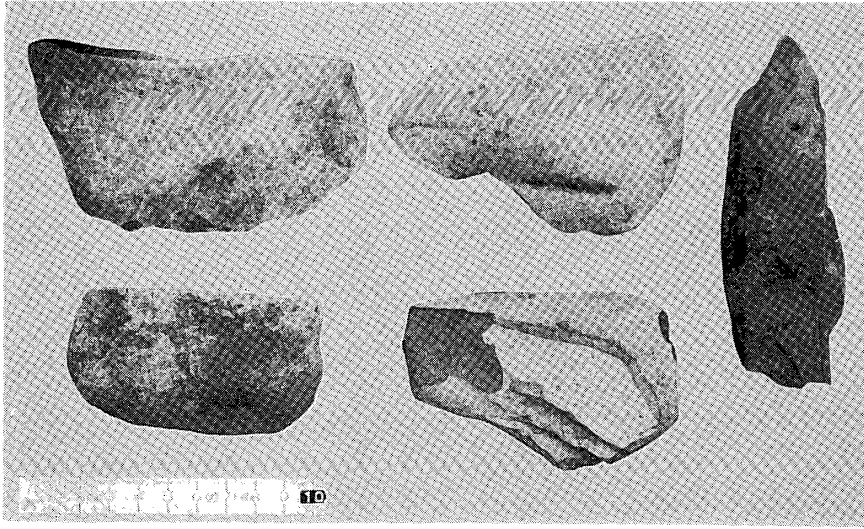
2. Artificially fractured, round river-pebbles from Tham Hoi.



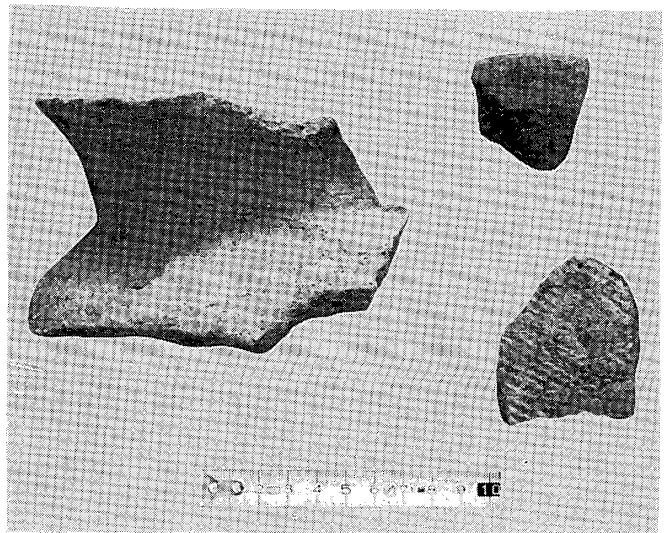
3. Several pieces of shells and potsherds from Tham Hoi.



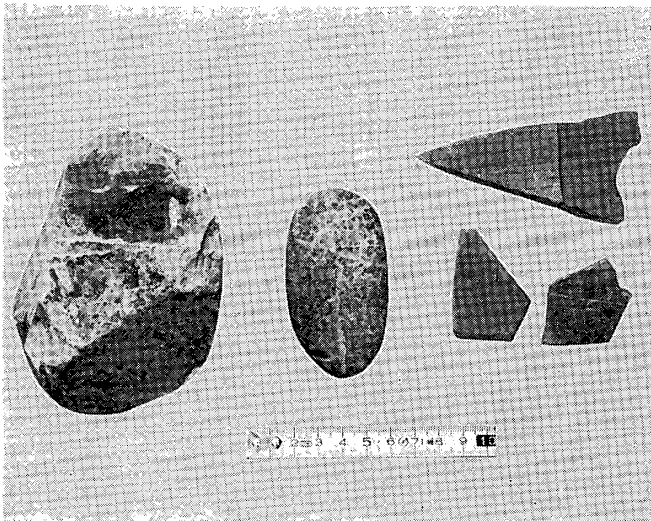
Pl. VI



1. Stone artifacts from Tham Lay, including a coarse sumatralith (lower left) and 2 large flakes which morphologically look like short axes (upper).

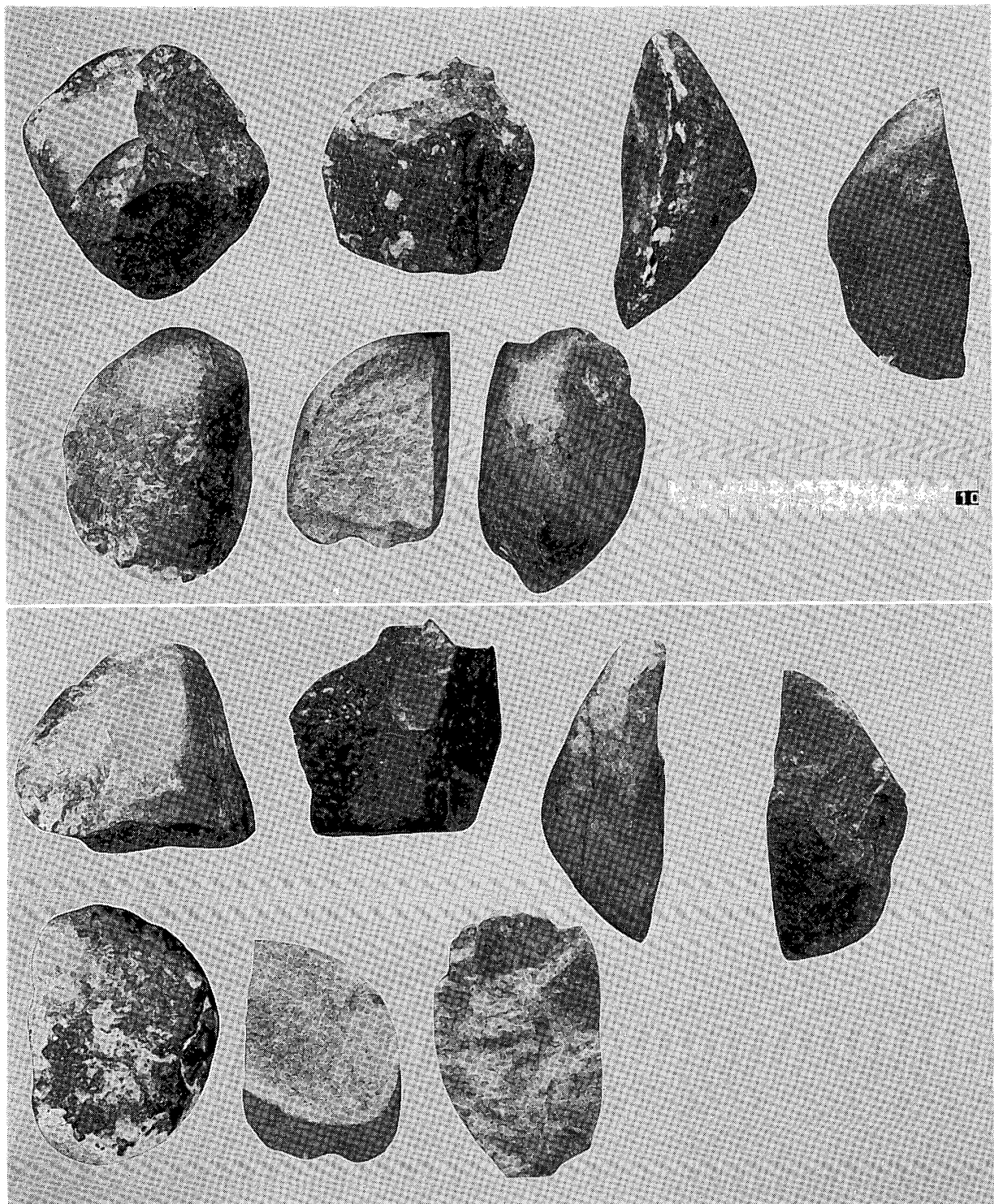


2. Potsherds from Tham Lay.



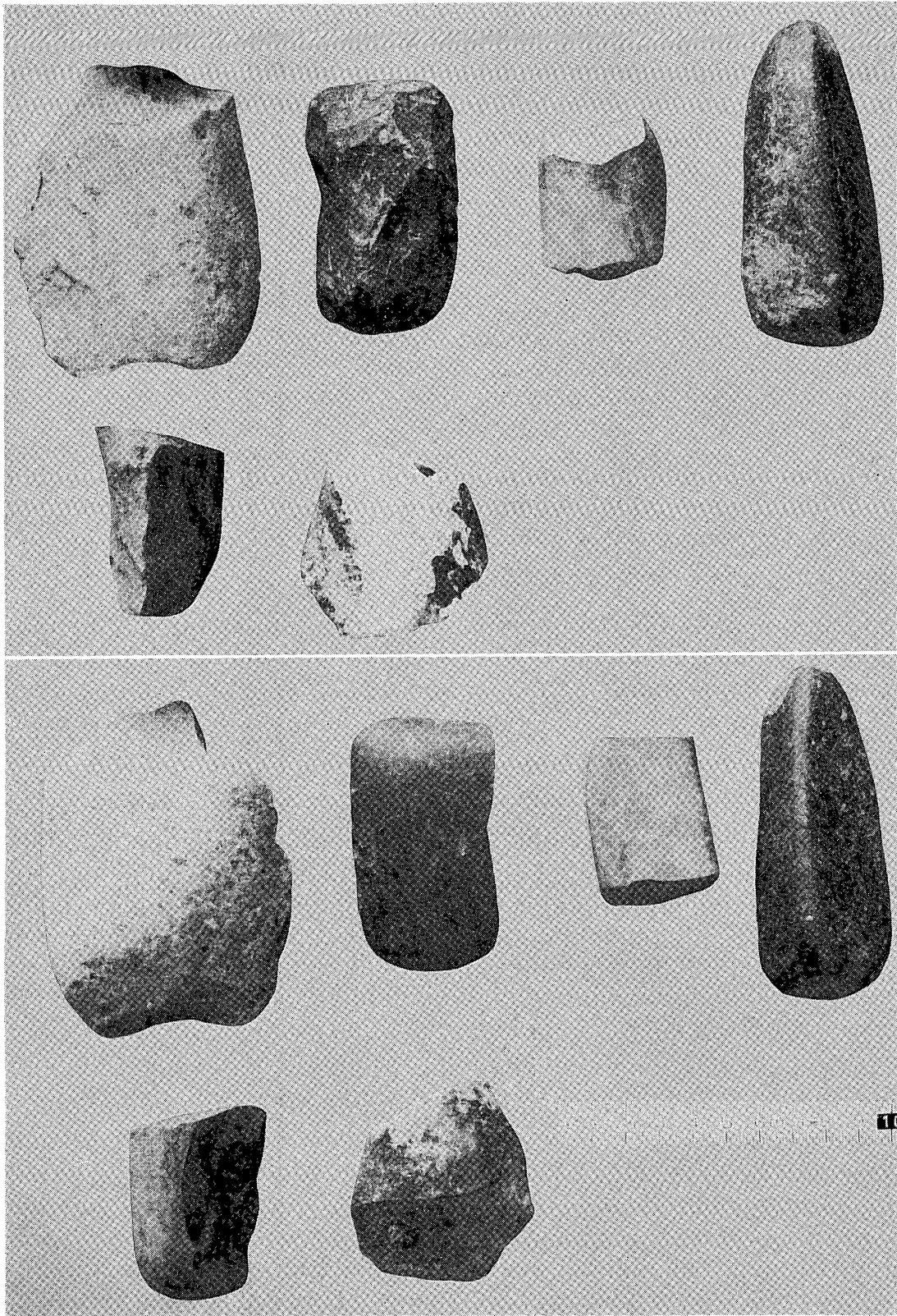
3. River pebbles and potsherds from Tham Pha Chao.

Pl. VII



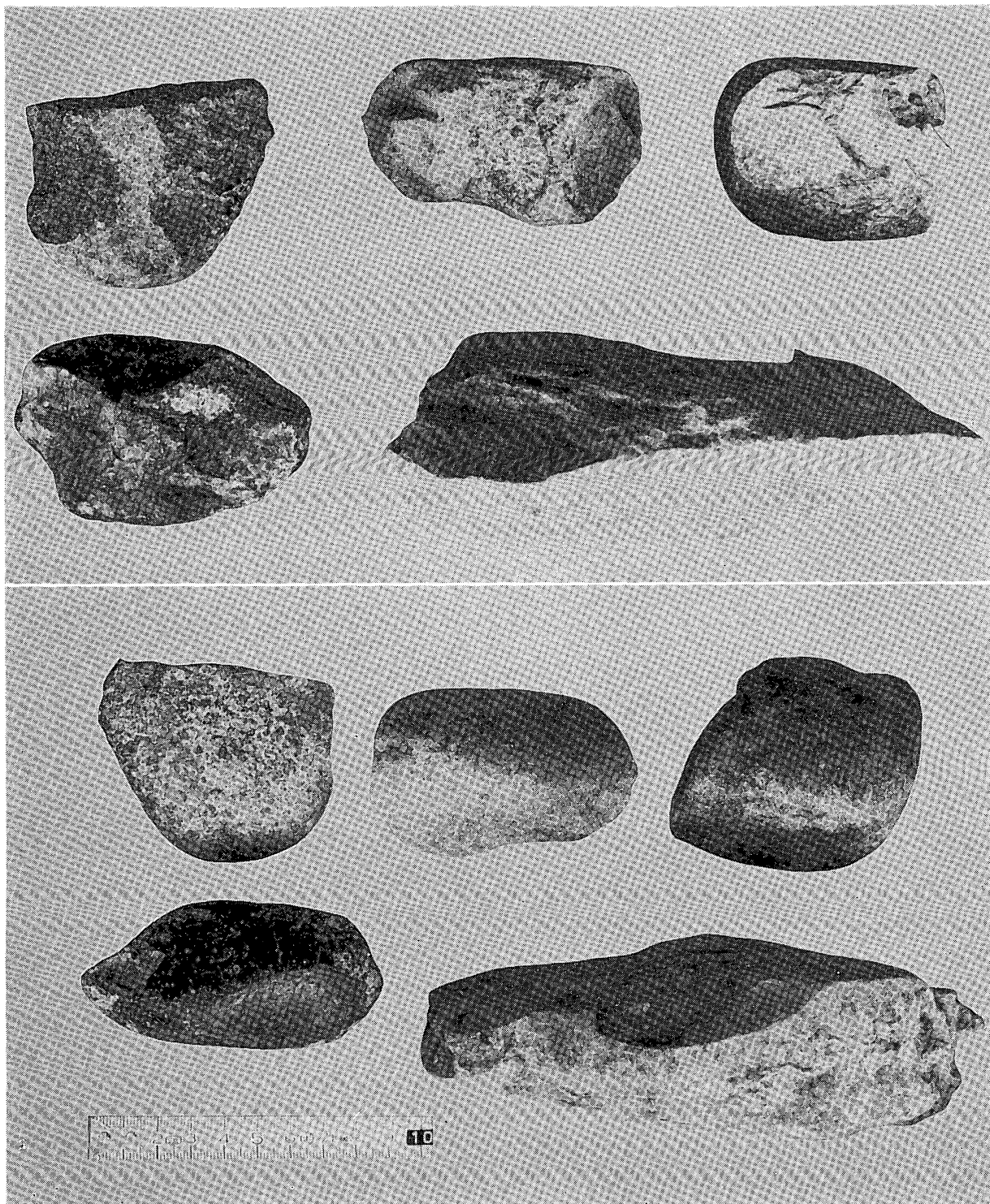
Stone artifacts from Tham Hoa Pou, including 2 choppers (upper left and center) and a hammer stone (lower left).

PL. VIII



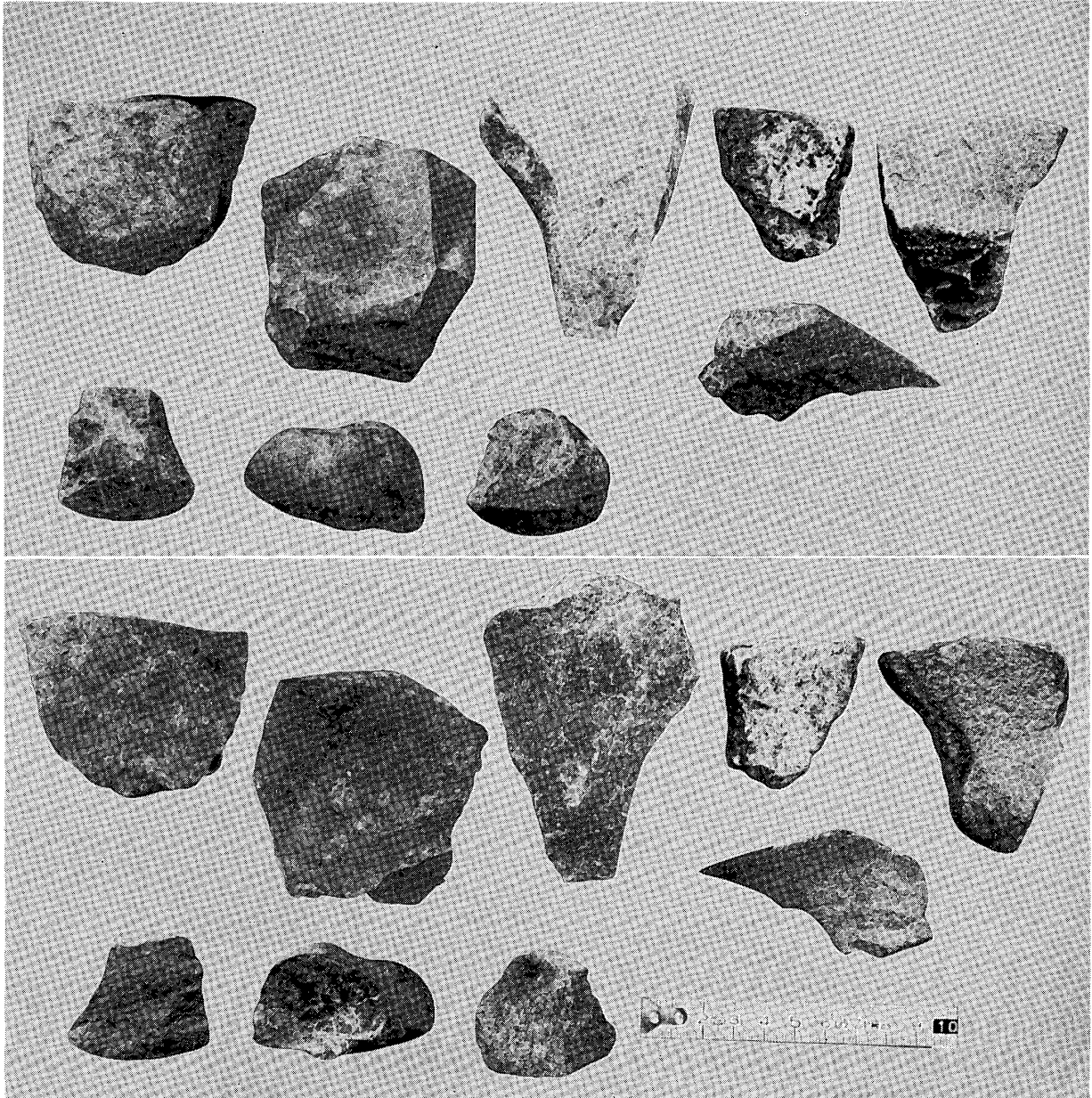
Stone artifacts from Tham Hoa Pou, including a chopper (upper left), a sumatralith (upper center) and a pestle (upper right).

Pl. IX

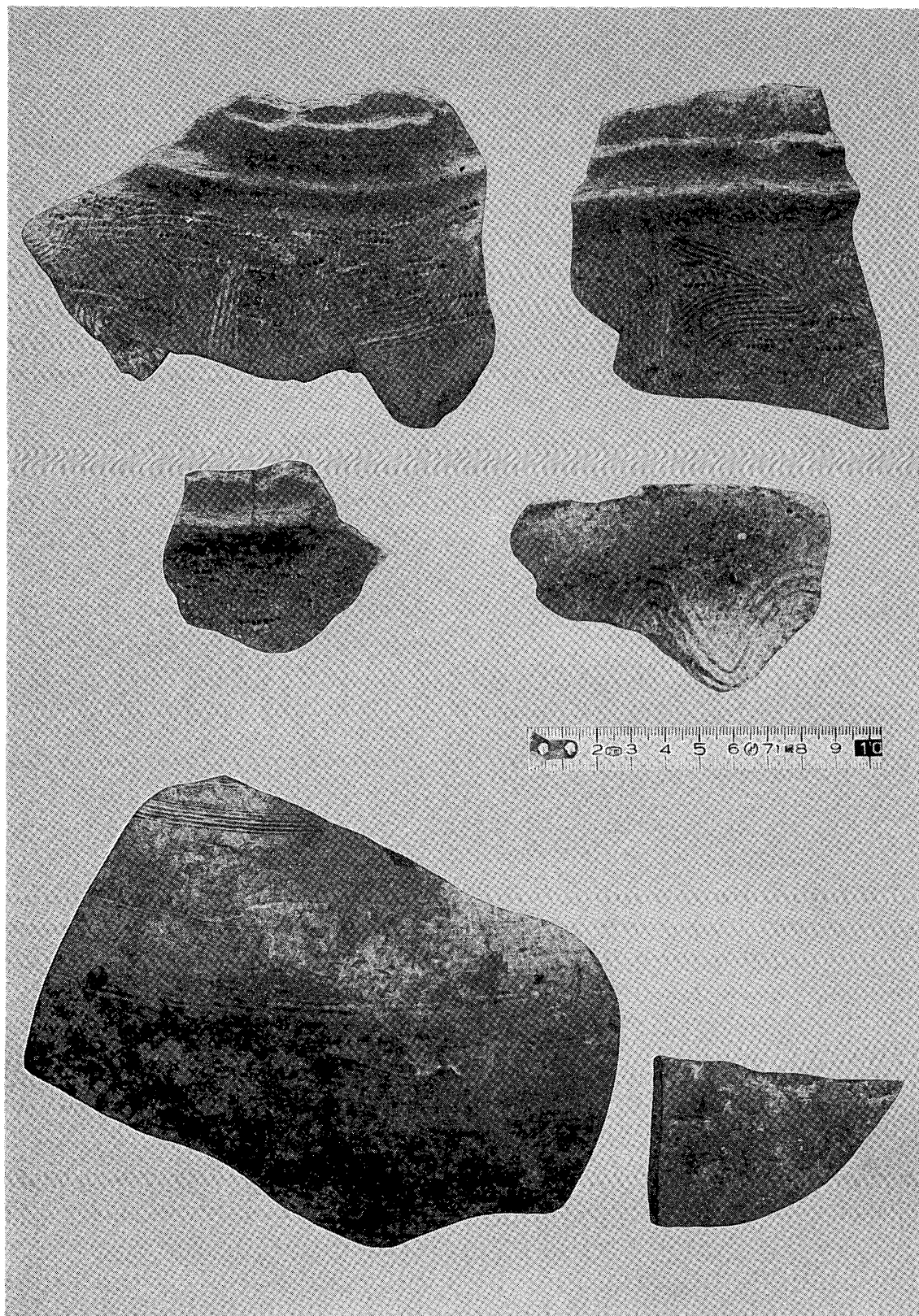


Stone artifacts from Tham Hoa Pou, including a short axe (upper left), 2 crude sumatraliths (upper center and lower left).

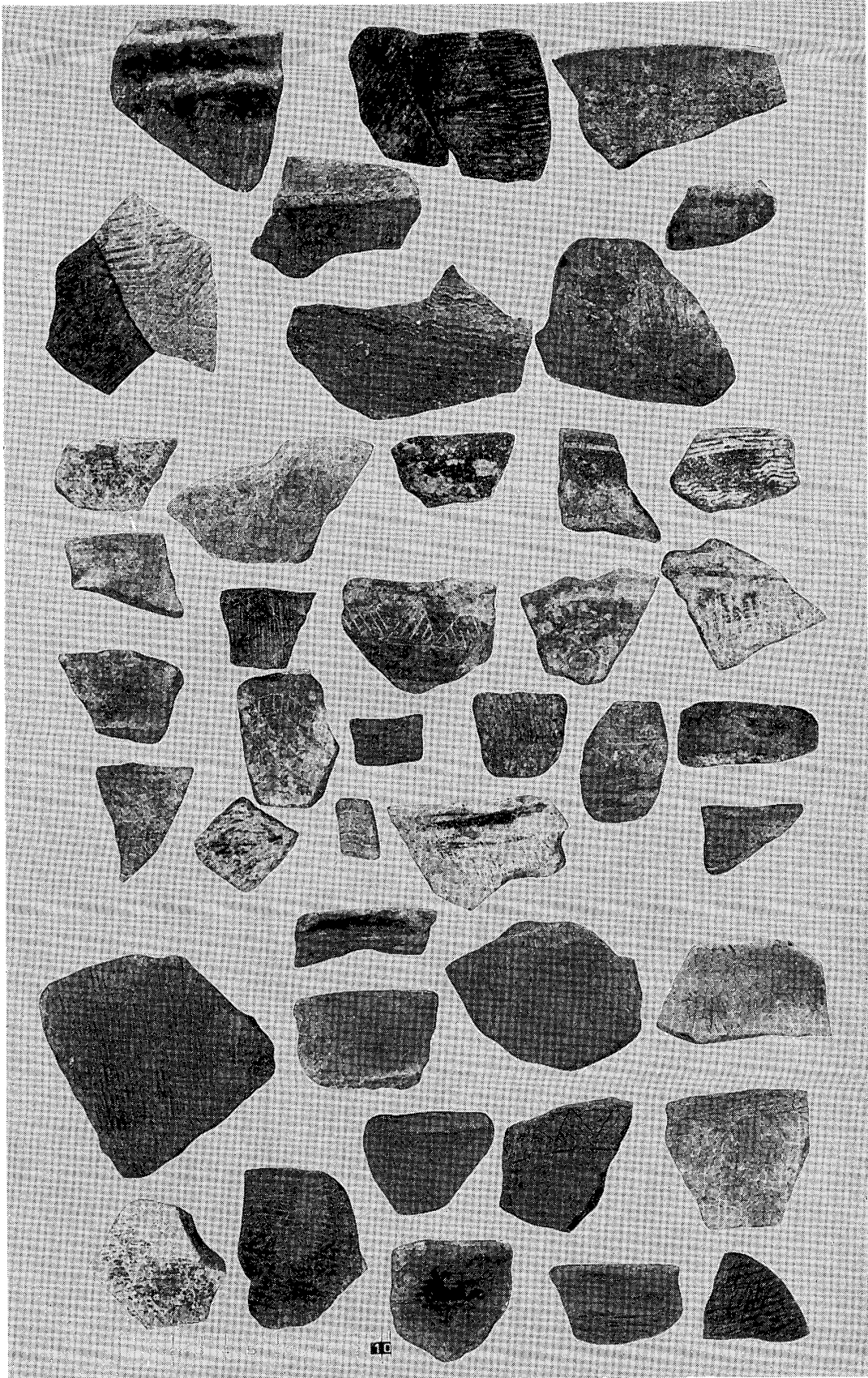
PL. X



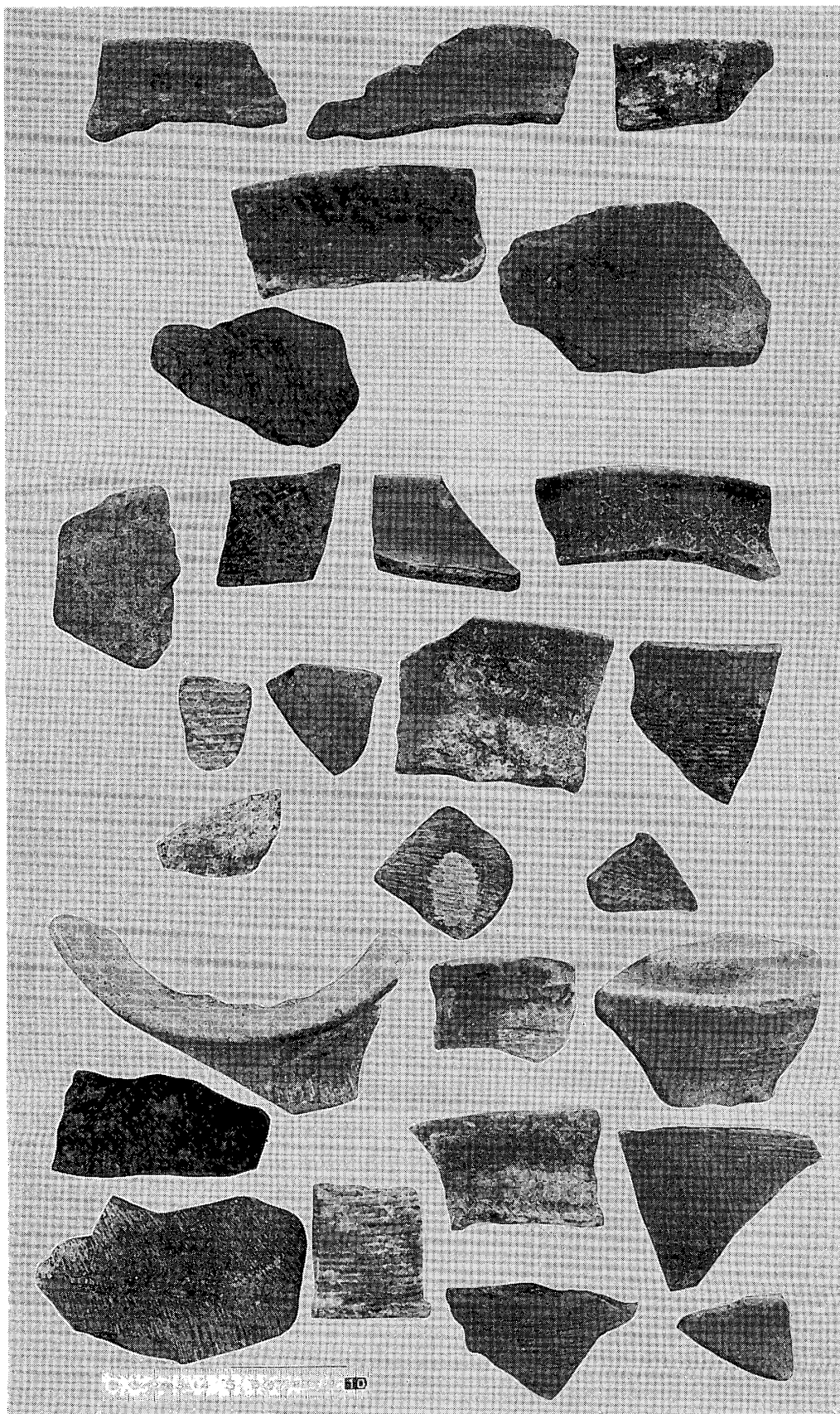
Stone artifacts from Tham Hoa Pou, including a short axe (upper left).



Potsherds from Tham Hoa Pou.



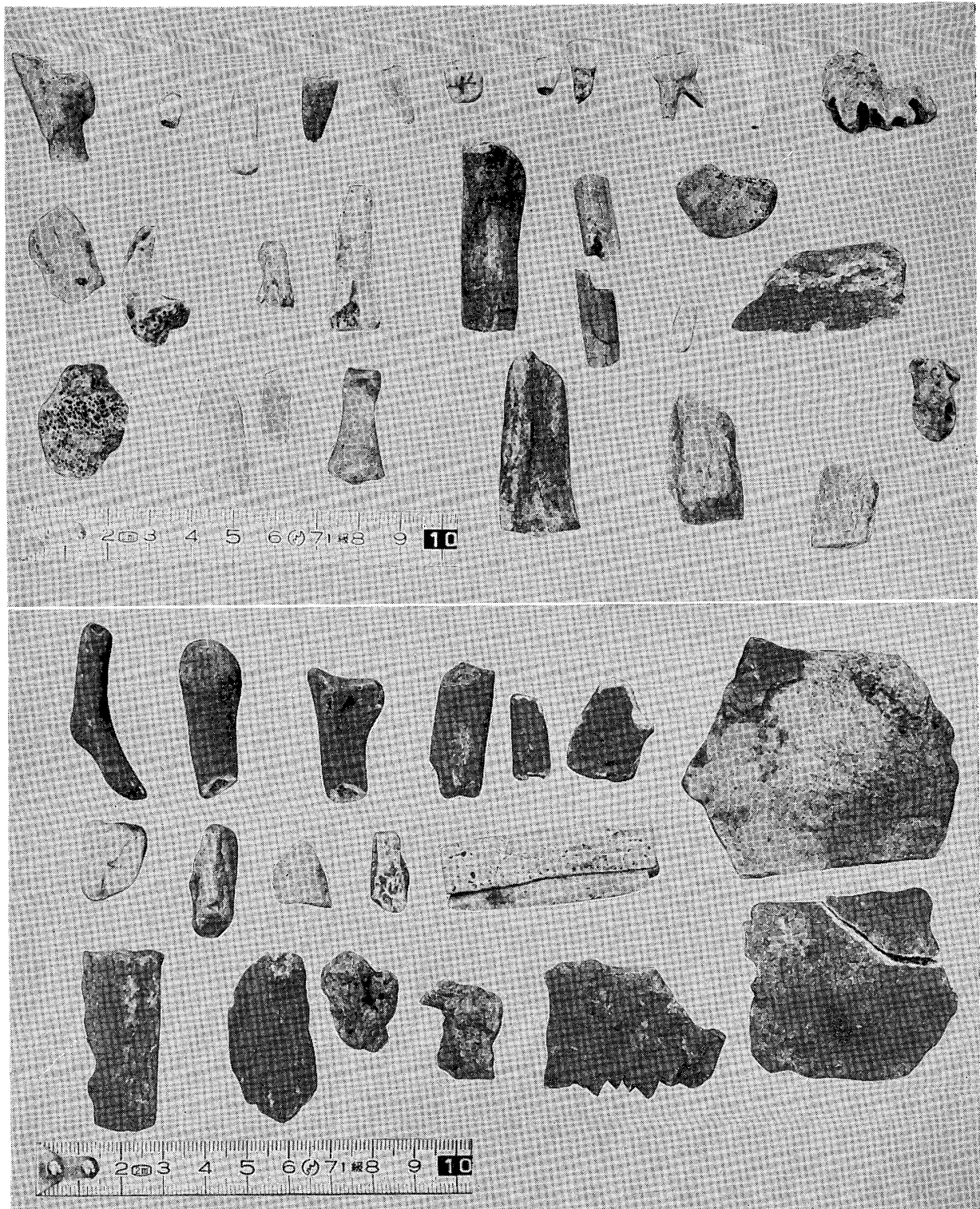
Potsherds from Tham Hoa Pou.



Potsherds from Tham Hoa Pou.

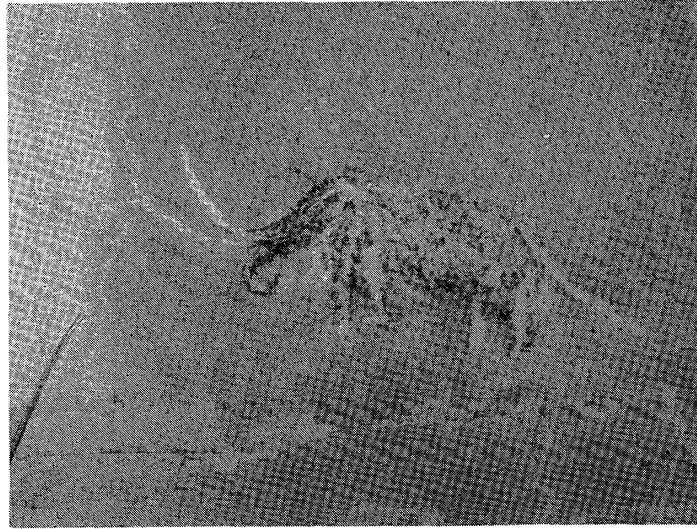


Pl. XIV

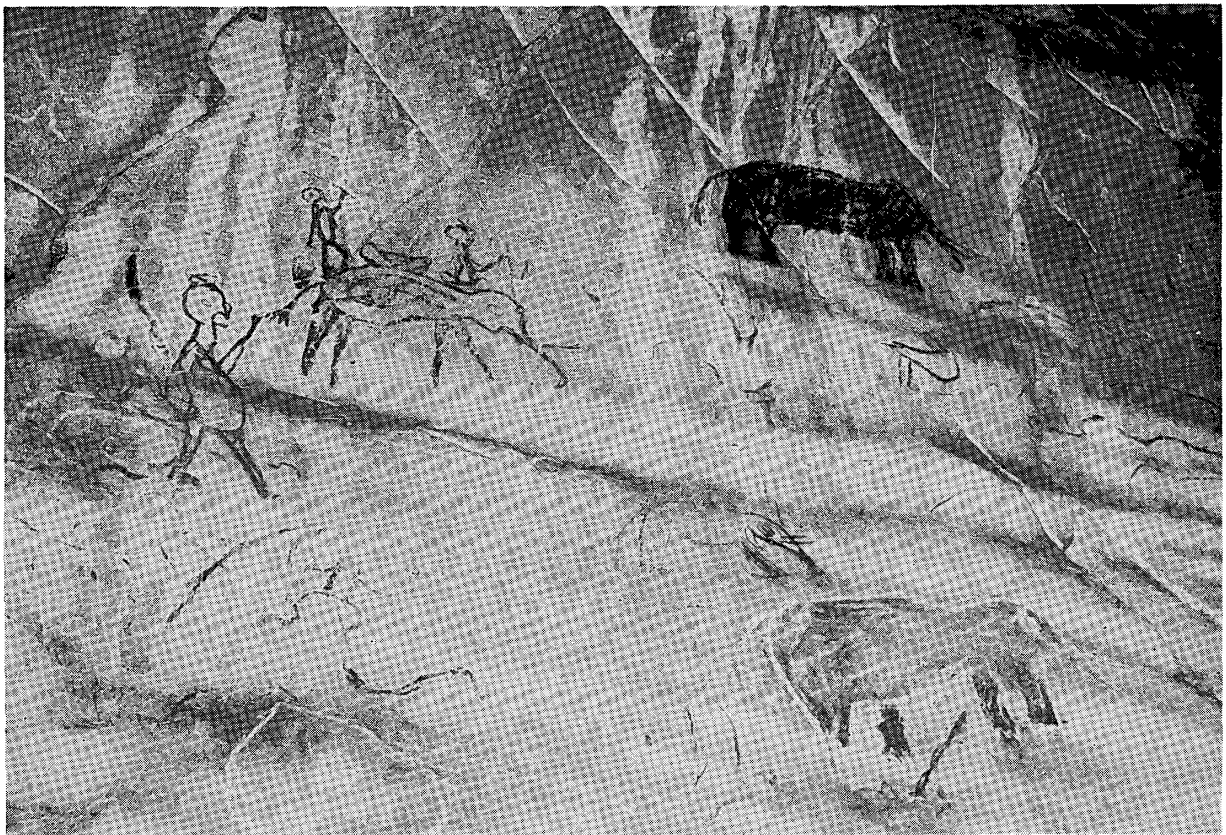


Isolated human teeth, human skull and bone-fragments and a pendant (center of the lower photograph) found together in the center of Chamber I of Tham Hoa Pou.

Pl. XV

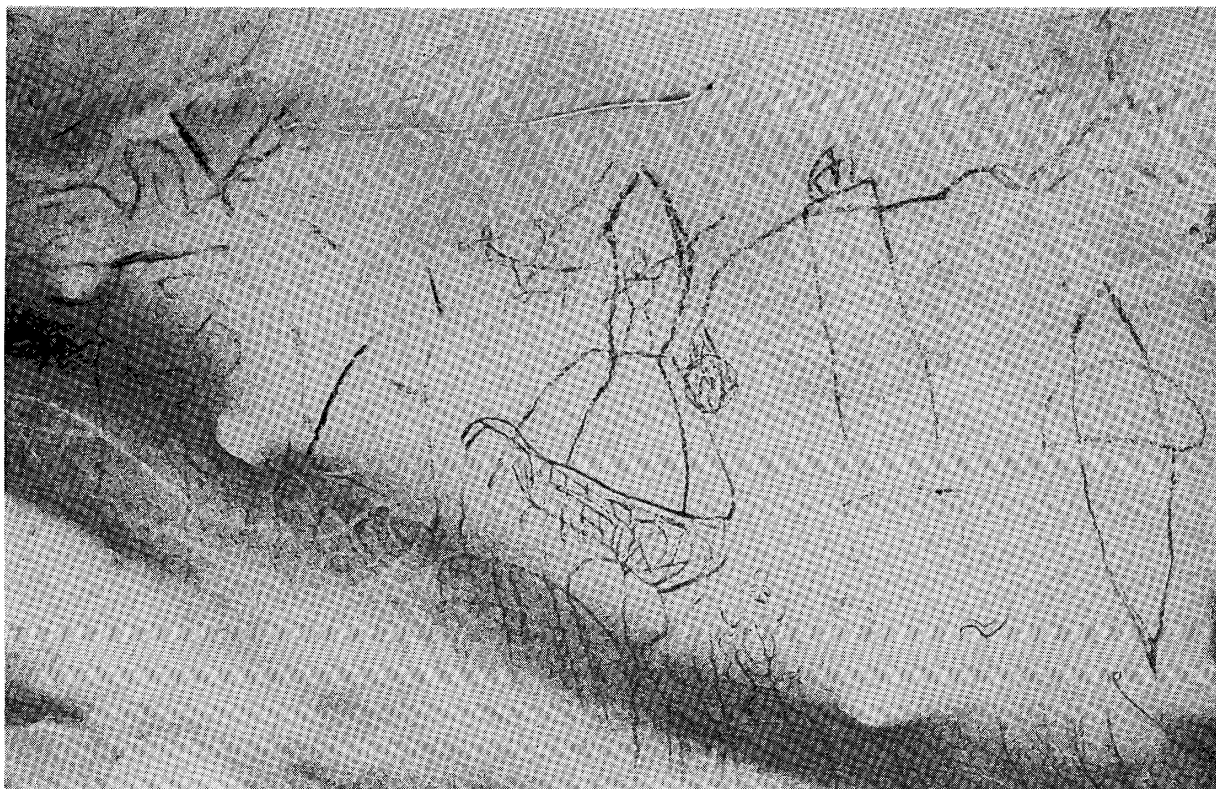


1. A quite realistic elephant painted in black and white. This figure is situated closest to the entrance and as high as 6,5m above the floor. It measures approximately 64cm in the maximum length.



2. Scene of an elephant hunt. The panel shows a tame elephant with a rider on the back, a beater, and a noisemaker trying to capture wild elephants. The same communal hunting is still practiced today in southern Laos.

Pl. XVIII



1. A small drawing of a rider on an animal and larger drawings of human figures in strange forms.



2. Miscellaneous drawings representing animals and men in various postures and forms. Note the men sitting on curious stands (upper middle and the center).

Pl. XIX



Human figures drawn in various forms and postures. Those in the upper left corner and on the left hand of the center are similar to one of the spearmen of Pl. XVI-2 in form and posture. The sitting figures in the upper right corner resemble to those of Pl. XVIII-2 in the style of drawing.